
お家の国のアリス

鶇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お家の国のアリス

【Nコード】

N4144D

【作者名】

鶯

【あらすじ】

…夜ひとり、童話【不思議の国のアリス】を読んでいたとき物音が…！！アリスの家に落ちてきた不思議の国の住人とアリスの物語。遅くなって申し訳ありませんm(_ _)m後少しで更新できる予定ではあります(_ _ _)まじすいませんorz

1日目 嵐の前の嵐

日曜日の昼下がりに

庭の大きな木の影で

姉が本を読んでいる…

（座って読めばいいのにな…

あんなに動いて暑くないのかな…）

そう、今は夏の真っ直中。部屋の中で冷房ガンガン効かせて涼しむのが普通ですよー

…しかし

我が家の冷房は壊れてる…

理由はそう…

この炎天下の中、わざわざ木陰から抜け出し、小芝居しながら童話

【不思議の国のアリス】を私に読み聞かせてる姉のせい…

事の発端はそう…

姉のこの発言…

「今は地球温暖化！！冷房は28 設定よ！！だから今日から我が家はそう設定するのよ！！決まりね！！」

いつ我が家は姉の持ち物になったんだろう

食事中にも関わらずいきなり閃いたように席を立ちそう叫んだ

もちろん手は握り拳。

あーあ、正直スープ零れて勿体ないと思いましたよ…

これだけじゃもちろん冷房は壊れませんよ？

この後会話が問題…

父「えー暑いからヤダ」

膨れ顔でぷんっ…て50代の父親がやるもんじゃないですよ…正直気持ち悪い…

姉「そんな…！暑いからって我儘言わないでお父様…！今国民の方々はそうしているのよ…！やってないのは我が家くらいなものよ…！」

母「どこもやってるとこなんてないわよ」

…うわっ冷たいっ…母…！スープ冷めちゃったじゃんっ

姉「そ…！…そんなこと…ないはずよ…」

いつ見ても姉は母に頭が上がない

そして自信も無くなったらしい

そして…

父「まあお母さんもこう言ってる事だし（ニコッ）家の冷房全部破

壊しないかぎり28 設定にはしません(ニコニコッ)「

待て父…そんなことしたら28 設定どころか家は蒸し風呂になるよ?!

SI・KA・MO!!!

父!!アンタは18年間も姉と暮らして来たにも関わらず!!

姉の行動力を忘れているのかこの50代が!!!!!!

姉「わかったわ…」

…きたっ…

姉「壊せばいいんでしょ!!やってやるわよっ!!」

…こうして姉の破壊活動は始まり、見事1、2、3…わかんないやまあ数えきれない数ほどある冷房が見事すべて役目を強制的終了…
哀れ冷房…

そんでまあ姉の破壊活動中に帰って来た兄も被害をくらい肋^{わき}5本、右腕、左足を複雑骨折まあ、入院。まあ兄は…うん、なんとかなるって信じてる

まあ、その惨状を見た父は真っ青。母は海外行のチケットを手配してたな…たぶん懇願してすぐる父と非難するんだろ…ヤダモンネ蒸し風呂

私もいれてクダサイ

あ、無理ですかソウデスカ…

目で睨まれたんだぜ…

私無関係なのに…

そして今、満足そうな顔をして小芝居してる姉と蒸し風呂で二人きり…庭にいるのは蒸し風呂が我慢出来ないから…

はあ…どっから見ても豪邸なのに…姉め…

と、いきなりケータイの着信音…なんで世にも奇妙な物語なの…

「もしもし」

『あ、姉？今日からさーアメリカに行くんだー　よかつたら一緒に
いかなーかなーって電話したんだけどどう？』

陽気だ…陽気な声が聞こえる…声でかいなおい姉友Aめっ！！

「えっ！！まじで！！行きたーい！！」

『じゃあ行こうよ！！』

「あ…でも…」

姉がこつちをチラ見する…

んな何回も見なくていいし…；

「…行って来ていいですよ？」

これ以上姉と一緒にいたら面倒な事になる…

長年の…てか、16年の私の経験が物語っている…

「え？ほんとに？！やったー！！姉友A！！行くわー！！」

『よっしゃっ！！そうと決まったら夜迎えに行くから待っ…てな！
！』

ダメなげえよ…

てか、イキナリ…

「おっけー！待っ…てるう」

なんでしょうかこのハイテンション…ついていけない…

じゃっ！！と言って電話が切れた

「アリス！！てなわけで夜露死苦」

古い…古いよ姉…

「はいはい、気をつけてねお姉さん」

「うん！！」

と言葉を置いて猛ダッシュで蒸し風呂の中へ走っていきました…

まあ、冷房は明後日には直るんだけどね。金持ちってやっぱいいな。
庶民な暮らしは私にはきつと出来ないな

いや、家事全般は一応出来ますよ？勘違いしないでくださいね？

まあ、夜になって姉は旅立ちました

「一年位は帰らないからー！！一人で頑張ってねえ」

…ちょ待て、親もそのくらい帰ってこないぞ！？だって使用人が一年の有休とらされてるから…

ほんと一人だ…まあいいか楽し

そして蒸し風呂に一人になった…

あ、兄…お見舞いには…行かなくていいか

家が騒がしくなったのは新しく冷房が取り付けられ、ひとり優雅に姉が落して行った本【不思議の国のアリス】を読んでいる最中だった…

1日目 嵐の前の嵐（後書き）

なかなか長くて申し訳ないです
次からは読みやすいように頑張ります！！

2日目 突然の来客者

「ふう……」

冷房の修理業者が来たのは朝の8時…作業が終わったのは夜の10時…

そりゃ広いからね…

仕方ない事だと思うけど……

ただ…お茶とか差し入れるたびに絡んでこないでほしい…
やりたくてやってるわけじゃ…!!

「やりたくないのになんでやってるんだ…私…マジ疲れた…」

部屋に戻って寝ようと思いベットに倒れこむ

…ドシンっ…

「…おいベット…私はそんなに重いのか? (怒笑)」

まあそんな事をベットに言っても仕方がないことはわかっているの

で、ため息をついてアリスは目を閉じる…

…

………

………

「寝れないとかマジ無いわぁ…」

ふと起き上がりなんかないもんかと机の上を見ると

「あつたあつた」

それは姉が残して行った【不思議の国のアリス】

「寝るまで読もーっと」とページをパラパラ

…はっ!!

私としたことが読みふけていた…
時計を見ると午前2時…

まあ、夏休みだし…始まったばかりだから別にいいんだけどさ…

「……静かだな…」

誰もいない…

この広すぎる家に私ひとり

「…あー…やだやだ…どうせ私は淋しがり屋ですよー…」

つとちよつとした心の本音を呟きまた本の世界にいらつとした…

その時だった…

「…っ…うわああああ?!?!?!」

ガッシャーン!!!!!!!!!!

突然の悲鳴と物の壊れた音…

「…っ?!?!」

いきなりの物音に私の寿命は3年縮んだと思う…
ようはビビったわけですよ

泥棒?

でも…ねえ?

こんな物音たてたら泥棒失格だよね…

「とりあえず確かめないと…」

そう思い私は物音のしたリビングへと向かった…

2日目 突然の来客者（後書き）

さあ誰が落ちてきたんですかねー？

…誰にしよう…；

ほんと…誰にしよう（滝汗

3日目 時計と男の子

私は…目の前にある物が信じられない…それと同時に絶望的になつた…

扉の前から気付かれないように中を除いて見ると

倒れた棚…

散らばった食器…

半壊したテレビ…

吹っ飛んでるテーブルと椅子

無事なのは時計くらい…

そして…

時計と向き合うように啞然とへたりこんでいる男の子が一人…

「うわ…なにこれ…」

あまりの惨状にそれ以外言葉が出て来ない

…つとその声が聞こえたのか男の子が振り返った

大きな目に涙を浮かべながら…

やばい！！

って思った

まあ…瞳に涙いっぱい…

けどちょっと恐怖が…だって目が赤かったから…

体が動かない…

ドラマとかで殺されそうなとき絶対逃げられそうなのに殺されるの
ってこんな感じだからかな…

そんなことを思っていたら

「…」

「？」

「…」めんなさああああい！……！……！……！」

…大泣きされてしまいました…

「ちよつ…?!」

声の大きさにびびり私は思わずその男の子をなだめに駆け寄った

「とりあえず泣きやんでっ!!ねっ?!」

必死で…止める…

泣いてる子なんてなだめた経験少ないしっ

なんて声かければいいのっ?!

「とりあえず泣きやんでよ…私が泣きたいよー…」

声はおさまったもののまだ嗚咽をあげている男の子を困ったように
見る

と気付いた事がひとつ…

さつきは真っ赤な目が印象的過ぎて気付かなかったけど…

「み…耳…？」

男の子には白いうさぎの耳がついていました…

本物なのかなー？

「ねえ男の子。」

少し喋れそうになったのを見計らって喋りかける

男の子は少し大きなYシャツで袖をぬぐい
キョトンとした顔でこっちを見る

チェックの緑のベストに白いYシャツ、チェックの緑の短パン、赤
い蝶ネクタイに銀の懐中時計をぶる下げている

「…見掛けない姿だけど…何処から来たの？」

少し困ってそれから指をさした…

「あれ…」

「…は？」

その男の子が指したのは時計…うちにある大きなのっぽの古時計…

「あの時計から来ました…」

上目づかいで見られる…

あーロリはこれに殺られるんだろうなー

「って…そしたら君どこの人だよ…人かどうかも怪しいけどさ…」

普通に話してる自分尊敬するわ…わらい

「あっそうゆうことですか…!!」
少し回復してきたのか涙はたまっていくものの少し元気が出て来た
ようだ

「僕は【不思議の国】から来ました。白うさぎです…。」

…私は夢でも見ているのだろうか…
夢なら冷めろ…私…

3日目 時計と男の子（後書き）

まとまってないですね…

ほんと申し訳ないです（、、；）

4日目 片付けとそして

「あ…あの？」

「……………え？」

白つさぎと名乗った少年が顔を覗きこむ

そうだ…フリーズしてる場合じゃない…

周りを見渡す…家具が勝手に片付いてくれるわけじゃないから未だ散らかり放題だ。

「大丈夫ですか…？」

「まあ…なんとか…」

とりあえず片付けなきゃな…

「よしっ！…！」

気合いを入れて、白つさぎくんを横目で見ながら

「君も手伝ってね？」

「は…はい!!」ちょっと混乱が交ざった顔だった私が片付け始めたせいか彼も同じように作業を始めた。

… 45分後

「ふう…」

やっと終わりの兆しが見えて来た。あとはひとりじゃ運べないテーブルとかを元に戻して終わり。

「次はなにをすればいいですか？」

「じゃあ、このテーブルの反対側持つて貰える？」

よいしょと二人で運ぶ…が…彼は力があまり無いらしく、こんな重い物は持てないらしい…

「う…うわぁ??!!!!!!」

ドスンっ

潰れた。

「だっ大丈夫ですか?!」

「う…うん…」

聞きたいのはこっちだよ…なんでそうなに力がないんだ…？
このテーブルだって流石にひとりじゃ運べないけど、女二人ならなんとかなるのに…

「これじゃ運べないな…」

ふたりで困った顔をする。と、いきなり

「あー！」

つと彼がひらめいたように声をあげる

「ん？なに？」不思議に思っただけを見ると、

「テーブルはこの位置でいいんですか？」

とイスの間を指差して尋ねてきた。

「う…うん」

「わかりました。じゃあ離れてくださいね！ー！」

耳がぴよこぴよこ動いてる…なんか可愛いなあ…無類の動物好きとしてめっちゃヒットなんだけどなあ…

私が離れた事を横目で確認した彼の耳がピンと立ったまま静かにな

った。彼が集中しているのが空気でわかるくらい…

なにが起こるのかと不安になったが、その瞬間…

テーブルが浮いた…

「…は？」

浮いたテーブルはさっき彼が示したところに動いていき、そのまま静かに床につき動きを止めた…。

「ふうっ」

終わったのだろう彼が啞然としている私を振り返った。

「？どうかしたんですか？」

「へ？あつ…いや…」

質問するかどうか迷ったがする事にした

「今の…なに？」すると、キョトンとして

「え？魔法ですよ？」

まあ超能力だとか魔法だとか大体予想はしていたがやっぱり驚きは隠せない

「へっ初めて見た…！」

と彼は最初

「え？」って呟いたけれど、納得したようだ
「あ、こつちの世界にはいないんでしたっけ」

軽めに笑って言った。

「ん…待てよ？」

「はい？」

「最初っからそれ使ってたらこんな苦勞はしなかったんじゃ…」

そう、埃まみれになりながら…重いものを持ったり大変だったのだ。
特に半壊したテレビ…これは粗大ゴミに出して新しいのを買に行かねばならない

「あ…」

どよんとした空気がその場に流れた。

まあ、過ぎてしまった事は仕方がない。食後の運動とでもしておけば気にすることもないし+に思えるしね。

と…そこで今まで気付かないようにしていた疑問が明確に浮かんた…

「あ…不思議の国ってところから来たって言ってたよね…」

時計から出てきたことも国も怪しいが…とりあえず信じてみる事にした。魔法なんて物見せられちゃったら…ねえ？

「はい!~!」

「何処か行くとこあるの…?」

彼が今更気が付いたとでも言うような顔をして…

沈黙…

沈黙…

「な…」

彼が私を上目づかいで見つめて…

「ないです…」

「…やっぱ？」

耳が垂れてる…可愛いなあ…おい…

「どうするつもり？」

「どうしよう…？」

ふたりして苦笑い…

まあ、追い出す事もできるんだけど…不安だ…一回関わっちゃったし、そんな事したら後味悪いしね。生憎うちは、部屋も余ってる…家族も1年くらいは帰ってこない…

「じゃあ…」

「大丈夫です!!」

「え？」

「自分でなんとかしますから!!」

彼は笑って私をみた。今にも泣きそうだ…

そして、ドアを通して出て行こうとした。

「えっちょっと待って!!」

まあ…それなら別に引き止める必要もないんだけど…でもなあ…警察とかに捕まったらなんか…研究所とか連行されて解剖とかされちゃいそうだよなあ…
とか思ってたなら

「うわあああああ!!」

「…は?!」

見たら彼が転んでいる。しかも…ものの見事に顔面クリーンヒット…
…床に。

「大丈夫…?」

転びっぱなしもなんなのでとりあえず座らせる。

「すみません…」

痛いのだろう鼻を押さえている。

「あのさ…」

私は覚悟を決めた。

どうなるかはこれから決まる事だよね。それに…生うさ耳…は!!
違うう!!…!!…こんなドジっぱい人野放しにしたら大変な事になるし、掴まったら…

「…行くとこないならうちにいたら?」

「え?」

「どうせ…うちんち誰も帰って来ないし…それに…」

…生うさ耳…

「いいんですか?！」

彼が顔を輝かせた

「うん」

つられて私も笑う

…っとその時だった…

なんか空間が揺れてその後に大きな音が響いたのは…

4日目 片付けとそして（後書き）

白うさぎくんはドジっ子です笑

アリスは無類の動物好きなんで耳とかにめちゃくちや弱いんですね笑

さてさて、また誰か出てきますね〜笑
誰にしましょう（＾・＾）

5日目 二人目の来訪者（前書き）

今回は初登場の彼女の視点からはじまります！！

5日目 二人目の来訪者

…ん？ここはどこだ？

どっかから落ちたのは確かなんだが…

キョロキョロと周りを見るとやっぱり見覚えがない…

すると…こつちを凝視してる二つの顔に気付いた。

「?!」

少しびつくりして二人のいるほうに構えた。

「三月!？」

「白うさぎ?!」

「え??」

自分は目を丸くした。二人も同様にびつくりしているようだ。

だって…いきなり落ちたと思ったら知らない場所だし…白うさぎはいるし…仕方がないと思う。…見知らぬ彼女もそうなんだろうか

「なんでここに?!」

「それはこちらが聞きたい。」

自分はぱっぱとお気に入りの着物についた埃を落としながら白うさぎに答える。ん?あまり汚れていないな。ここの宿主は綺麗好きなのか?いいことだ。

「えっと…あの子…は…?」

彼女が白うさぎに尋ねているようだ。失敗した自分としたことが先に名乗るのを忘れてしまった。

「えっと彼女は

みつき
「三月だ。名乗るのが遅れて申し訳ない。」

白うさぎの言葉を遮り言った。

「え?あつ…私はアリスよ!よろしくね…?」

きつと自分の喋り方に戸惑っているんだろうな。周りから冷たいと言われるが…彼女もそう思うだろう。

「ああ」

「それより…」

白うさが苦笑いして言う。

「片付けませんか？」

「ん？あ…」

周りを見たときに気付かなかった…

テーブルが倒れてイスが散らばっている。まあそれ以外に片付けるものはないと思うが…

「そうね…片付けましょうか！！」

「さっきよりはマシですね」

「さっき？」

「僕が落ちて来たときですよ」

白うさが笑って言う。

「そうそう！部屋中めちゃくちゃになっちゃって片付けるの大変だったんだ！！」

「ふむ。」

それならこれは楽なほうだな。イス立てたし、今運んでいるこのテーブルを置けばお終いだ…

「ん？待てアリス。」

「え？」

「白うさぎは腕力がない…どうやってこれを運んだんだ？」

ふとした疑問。言った瞬間、自分は無駄な時間と体力に気付いた。

「え？それは白うさぎくんが魔法で…あ…」

アリスも気付いたらしい。テーブルを元あつたらしいところに置いて白うさぎを見る。当の本人はそんなこと気付きもせず、片付け（主に落ちたものを拾う）をしている。

そんな様子を見てふたりでため息をついた…。

「白うさぎ」

「終わったよ」

程なくして声を掛けると白うさぎが振り返りにこつと笑った。

「じゃあ片付けも済んだ事だし…寝ますか…！」

「はい！！三月も行くところないでしょうから一緒に泊めていただきましょう！！いいですか…？」

「私は構わないよ」

「ん？…ああ…よろしく頼む」

そういえば眠いな…

「じゃあ、案内するからついてきて!!」

アリスはそう言い、その後を白うさぎとついていった。

アリス side

大きな音がしたと思ったら、あの時計から出て来た…

茶色い肩くらいまである髪の毛と目、あと茶色のうさ耳…それから黒色に赤い花の絵の入った着物…

一瞬目を奪われるような可愛さ…可愛い女の子大好きな私にとって
はモロ好み…

見てたり会話をして思ったけど適応力があってこの状態にもあまり動じてないみたい…

声はなんか低めなのに可愛いってゆう!!わかんないかなあ?!
言葉は丁寧だね…

たぶん、性格はテキパキして男勝りな気がしなくもないけど…これは私の推測だからなあ…

とりあえず、白うさぎくんと同じで行くところがないっぽいので一通り終わった後、部屋に案内した。

その後、私は部屋に戻って、これからどうなるんだろうって思いつつもちょっと楽しみにしてたりしなくもない。

6日目 朝食

朝、私は二人よりも早起きして朝ご飯を作っていた。宿主がお客さんより寝坊してたら話しにならないもんね！！ってゆうのが私の考え。なにを作ったらいいいのかよく分からなくて試行錯誤の結果、定番のサラダ、目玉焼き、ハムにトースト…ほら…やっぱりうさぎ(?)だからね！！野菜かなって思ってた！！それに簡単だしね！！料理作れないなんてことないんだから…

と用意出来たところで白うさぎくんが降りて来た

「おはようございます。」

「あ、おはよー…！！」

…ヤバく可愛い…パジャマがサイズが合うのがなくてとりあえず兄のを貸したら…想像通りぶかぶかしてて…しかも寝ぼけ眼のクリクリシヨートヘアー…+伏せ気味のうさ耳が…光ってるキラキラしてるよ…！！おっと鼻血が…

「…おねーさん？」

あー…上目使いがヤバ…

「おはようございます。」

そんなことやってたら、凜とした可愛いクールな声が出た。三月ちゃんだ。昨日と変わらず素敵に可愛い。服は昨日と同じ物を着てい

る。

「おはよう!!」

三月ちゃんの声を聞いて少し現実に戻れた。

「白うさぎ。いつまでそんな格好で…着替えてきたらどうだ?」

「へ?…あ…」

今自分の格好に気付いたらしい。慌てふためいて

「…っ…着替えてきます!!」

つと真っ赤になって走り去った。まあ、私としてはよかったような勿体ないような…

「…それは朝食ですか?」

「うん!!」

三月ちゃんが朝食を指差して言う。

「なに作ればいいか分かんなかったからとりあえず作ってみたんだけど…食べれなかったら無理しないでね?」

「いや、粗末にしては罰があたる。是非いただくよ。それに…」

「それに?」

「美味しそうだからな」

「……………!!」

笑顔!! 笑顔!! ヤバい!! 可愛すぎる!! 私的心脏持つかなあ…

「アリス? 真つ赤だぞ? 大丈夫か?」

「え?! …だ! 大丈夫!! 美味しそうなんて言われた事なかったから!! ありがとう!!」

は…恥ずかしい…

っとそんなことやっていたら白うさぎくんが降りてきた。

「では、朝食にしようか」

そう言われ、全員が席につこうとした…その時

一人、先客が居る事に気が付いた。

ギョツとした顔でそいつを見ると、

「ん? 食べないの? 俺待ちくたびれたんだぞ」

ニヤニヤしながら言う。

「……………!!」

「「チエシャ猫!?!」」

チエシヤ猫と呼ばれたそいつはダークレッドの髪にピンクと紫の耳としっぽ。服は…タキシードっぽい…イメージ的にはチャライ執事ってとこかな。

「チャライ執事なんて失礼な」

チエシヤ猫は笑顔で言う。

「…?!」

「正真正銘、執事なんですけど」

「…なっ」

え?…読んだ?この人心読んだ?

「うん」

うっそー!!

「嘘じゃないよ」

絶対、私…今、百面相してる。

「なんで読めるのよ?!」

「え?俺だから」

開いた口が塞がらない

「それより食べようよ〜冷めるし。それに俺お腹空いた。」

なんて我が儘な。

「とりあえず…食べましょうか」

白うさぎくんが苦笑して言った。

朝食が始まった。もちろん私の朝食は家においてあったコンビニで買ったパンです…

6日目 朝食（後書き）

これからは5〜7日以内に更新頑張りたいと思います（＾－＾；）

感想などいただけたら嬉しいです。(^-^)
。

7日目 猫の落ちた理由（前書き）

軽〜くふれる程度です

7日目 猫の落ちた理由

「チエシヤ猫」

食事を食べ終えたらしい白うさぎくんが声を掛けた。

「ん？」

「どうやってここに？」

「ん？穴から落ちた」

パクツとパンを食べつつ答える。

「公爵の家にも穴があるんですか？！」

少し驚いたように言う

「んや？」

目玉焼きを口に放り込んで言う

「公爵夫人から君へ。ラブレターをね、届けに行っただよ」

「「ラブレター？」」

三月ちゃんと重なった。三月ちゃんは

「ああ、恋文か」と納得したように再び食事に戻る。パン半分程と、あとはハムが残ってるくらい。白うさぎ君はというと、少し真剣な顔をしている。三月ちゃんが納得したからだろう。私には気付かず答えてくれそうにない…

「そんでもって君の部屋に潜入してみたら…うわーお」

「落ちたというわけですか…」

「そゆこと」

「「ごちそうさま」」

三月ちゃんとチエシヤ猫の声の音が重なる。食べ終わったようだ。私？私はとつくの昔に…

「白うさぎ」

「はい？」

「自分の経緯は聞かなくていいのか？」

「なにを言ってるんですか？」

「？」

二人がキョトンとした顔で見つめあう。

「三月を呼んだのは僕じゃないですか」

笑って言った。

「あ……」

対象的に三月ちゃんはやってしまっただけ……みたいな顔。ふふつと私は笑ってしまった。

「ねえアリス。キッチンはあるところでもいいの？」

「ひぎゃあー!!」

びびびびつくりしたあ……!!……!!……だつて……二人見て密かに笑ってたし、なんかイケないと見られたみたいで……ふとチェシャ猫を見るとキッチンを指差しながら『は?』って顔でガン見している。

「何語デスカ?」

「う”っ」

チェシャ猫に鼻で笑っていわれた。

「……アリス語デス……」

苦し紛れに答えた

「なんだそれ。まあ、そんなことどうでもいいんだけどね」

「へ?……ひどー!!つくない……な……てかなんで私の名前知ってるんデスカ」

「じゃあ俺片付けるから、積もる話もあるだろうし、こゆっくり」

「スルーか！……！放置プレイという名のスルーか！……！」

口笛吹きながら奴はキッチンへと入っていった。

私はため息をついて三月ちゃんと白うさぎくんに向き直った

7日目 猫の落ちた理由（後書き）

三月の一人称は『自分』です

少しおかしいと思いますがご了承ください

m (— —) m

8日目　グダグダの買い物

「ありがとうございました」

定員さんがマニュアル通りのセリフと笑顔で言う

「よし！！これでチエシヤ猫の買い物は終わりね！！」

「あつ、アリスくアレも欲しいな」

チエシヤ猫が指差して言ったのはガラス細工の食器などなど

「今日はみんなの服を買いに来たんだからまた今度ね」

なんで今こんなことになってるのかと言うと、

「帰る方法がわからないだど?!」

チエシヤ猫との会話を終えた私にそんな言葉が飛び込んで来た

「はい、どうやってここに来たのかもわかりませんので…帰り方もわかりません。共通点を挙げるなら”僕の部屋から落ちて来た”と

いうところでしょうか…」

「ふむ…お前の部屋が原因…と考えるのが妥当か…それとも他になにかあるのだろうか…」

真剣な雰囲気には私は入れずじまいでその場にただ、たたずんでいる

「とりあえず…」

「ん？」

「当面の問題は着替え…ですかね。家についてはお姉さんが貸してくださるみたいですし…」

「ああ…アリスが気紛れでない限りはそれは大丈夫そうだな…」

んな！！私どんな印象よ…

「そんな印象なんじゃない？」

「…っ！！！！！！！！！！」

「…そんな…世にも恐ろしいものを見たような顔で見ないでよ」

ニヤツと笑って言った

「折角の素敵な顔が台無しだよ？甘栗色でセミロングのふわふわ髪なんてすごく好きなのに」

「なっ…！！！！！！」

近いっ！！近いよ！！絶対顔赤いつて！！！！

「照れちゃって可愛いなあ」

クスツと笑った

「そんな事より…」

「…なによっ？！」

そんな事って…なんか天から地へ叩き落とされた気分…

「…お金に自由はある？」

「…は？」

なに？女口説くような事言っておいていきなり金銭問題ですか？

「アリスはyesかnoか答えればいいんだよ」

その張り付けてるニヤツとした笑顔に色々重なりだんだんイラついてきて

「あるわよ！！なめないで！！じゃなきゃこんな豪邸住んでないわよっ！！」

「じゃあ決まりだね。覚悟はいい？」

「…は？」

「おーい！二人共」

「…ん？」

「アリスが買い物行くからついて来いってさ」

「…はあ？！」

お前！！人の金だと思いやがって！！

まあ…そのつもりだったけどさ…

「じゃあいいじゃん」

「…それもそうか。」

そして、

「いや！！悪いですから！！」

「自分の事くらい自分で出来る！！アリスが負担することじゃない！！」とか言って拒む二人を主にチェシヤ猫が担いで強制連行…
そして今に至る。

「さあ！！三月ちゃん！！白つさぎくん！！ちゃっちやと決めちゃおう！！」

二人を見ると

「いや…でも悪いですから遠慮しておきますよ」

少し遠慮しがちな目で私に訴える

「同じく。金を借りて自分の欲を満たす事は自分の道に反する。」

チラッとチエシャ猫を睨む

「そんな堅いこと言うなって〜困るのはキミらなんだから」

対するチエシャ猫はニヤツと笑ったあの顔のまんま…。

「そつだよ!!毎日同じのじゃヤダよ!!私が!!」

折角可愛いのに可愛いのに可愛いのに…

「でも…」

「私の気が済まないの!!」

「アリスもこう言ってる事だし〜」

「でも使い回せば平気といえは平気なので…」

「なによりも!!」

「…?」

「その耳と尻尾が目立ってるのー!!……!!」

いや、これは考え無しに連れ出して来た私に責任があるんだけど…

「「…あ」」

「だからせめて帽子は買うわよ！！」

どうやら納得してくれたみたい

そんなこんなで帽子を買ったら私が止まらなくなり無事4人の買い物を終えて帰宅！！

まあ、周りに見られていたのは仕方ないからいいとして、誰も本物だとは思わないだろうし！！

「あのっありがとうございました」

「アリス、感謝しておく」

少し照れながら言う…

か…可愛い！！

「いいんだよ…気にしないで！！」

「俺もお礼言つとくよ」

アリガト アリス」

「…いゝえ」

「えっなに？なにその反応？」

「なんでもない？」

「冷たいなあ」

「まあいいけど。」

まあちよつとチェシャ猫はね。いろいろやられてるわけですから…

「いろいろってなに？」

ニヤニヤ

「自分に聞け！！」

そんなやり取りをふたりがクスツと笑いながら見ていた。

9日目 お茶会（前書き）

帽子屋さんはまだ出てきません）・・・すみません

9日目 お茶会

「お茶会しませんか？」

リビングで掃除をしていたら、いかにも名案！…って感じで白うさぎくんが言い出した

「お茶会？」

「はい！！大きなお庭もあることですし！！いい感じに影もあるの…で…いいかなって思ったんですが…」

少し控え目気味になった白うさぎくんに

「いいね、やろうか！！」

「え？なに？お茶会やるの？」

ひよっこり出てきたチエシヤ猫が口を挟む

「はい！！三月も呼んでみんなでやろうかなと」

ニコニコしながら言う

「じゃあセッティング任してよく使ってみたいティーセットあるんだ」

「ん？あんたティーセットなんて持ってたの？…まあ、いいや。どれくらいかかる？」

「すぐ終わるよ〜これでも執事だからね。だから三月呼んできなよ」

内心、そんなにすぐ出来るものなのか？と思いつつも「よろしく〜」と言い残して、ふたりで三月ちゃんを呼びにいった。

コンコンッ

「…はい」

ガチャ

三月ちゃんがドアを開けた。

どうやら、前に買った服…着物を片付けていたらしい。入っていたと思われる空箱が山積みになっている

「ん？アリス…と白うさぎ？」

「あ、邪魔しちゃったかな？」

「いや、そんなことはない。」

「あの、今からお茶会しようと思うんですけど…一緒にどうですか？」

「お茶会？」

「うん！！今チエシヤ猫が用意しててね、白うさぎくんが考えたんだよ」

「毎日お茶会やっていたのでやらないと寂しいかなと…」

「えっ…毎日やってたの？！」

「ああ…」

「僕は毎日はやってませんでしたけど、三月達のところになまにお邪魔して…」

白うさぎくんがそこまで言ったとき、三月ちゃんの表情が少しだけ曇った

「…？どうし…」

チリンチリーン

尋ねようとしたときに庭のほうから綺麗なベルの音が聞こえた

「おい、用意出来たよ」

チエシヤ猫の声だ。

「今行くー！！」

つと大きな声で叫んだあと、
「話はまた後で！！行こう！！」と言ってチエシャ猫の待つ庭に向かった。

なんだかんだでこんな生活にも慣れてきた。

朝起きると三月ちゃんがもう起きていて、朝食が出来た頃に白うさぎくんが起きてくる。

チエシャ猫は…私より早かったり…かと思えば夕方くらいまで姿を現さなかったり…ほんと猫って気紛れ…。

…つと、ひとりキッチンに向いながらふと思う。

お茶会をしていたところ、お茶菓子がない事に気付き、

「だって、見当たらなかったんだもん」…つとチエシャ猫。キッチンにクッキーがあつた気がしてひとり探しにきた。しかも…チエシャ猫が使つてみたいと言っていたティーセットはやっぱり私の家の使つていなかったやつ。まあいいんだけどさ！！なんで無断なのよ…

来的时候、三月ちゃんが一緒に…って言っていたけど、そんな時間がかかることでもないし断った。なにより、久し振りだというお茶会を楽しんで欲しかったし。

「行ってしまった…」

アリスがいなくなってからのお茶会場。

「その内戻ってくるよ」

「それにしても…やっぱりお茶会と言うと…」

「帽子屋を思い出すねっあと眠りネズミ。」

チエシヤ猫が鼻をならして言う。

「チエシヤ猫はほんと帽子屋が嫌いだな」

呆れた調子で三月が言う。

「うん。俺もあんなに相容れない奴がいるなんて思わなかったよ」

「けど…三月は帽子屋が好きなんですよね」

「えっ…あんなのが好きなの?!三月…悪趣味だね?」

「誤解するな…別にお前が思ってるように見ているわけじゃない。放っておけないだけだ。」

「ふん?まあイケド。いなきやいないで寂しいもんだね。」

「ん…ああ…」

三月の顔が曇る

「……ずっと気になっていたんですが…」

「どうした？白づさぎ」

「チエシヤ猫と帽子屋って…なんで仲悪くなっただんですか？」

「ん？ああ…それはねえ」

「「ギャーーーー！！！！！！！！！！」」

いきなりアリスの悲鳴が聞こえた。

「「「？！」」」

その場の全員立ち上がり、駆け付けようとしたが

「俺が行ったほうが速い！！待ってる！！」

チエシヤ猫の制止にふたりが止まった。すぐにチエシヤ猫の影は見えなくなり、

ふたりは呆然としながらその場に残されたのだった。

9日目 お茶会（後書き）

ギリギリの投稿になってしまいました（^| ^ ;）

バレンタイン企画を書こうかなと悩み中です（ ・ ）季節が全く違いますからね。なんせ夏ですw

もし読まれてる方で書いて欲しいと言う方がいらっしやいましたら、感想などでお知らせくださると書く気ができるかなと思います。

なのでお任せで！！

毎度読んでいただきありがとうございます（ ・ ）（ ・ ）まだ終わリませんw

10日目 冷蔵庫が空のようです

…ドンッ

キッチンの入り口を通り抜けた瞬間アリスとぶつかった。

「きゃっ?!」

「うおっ?!」

びっくりして軽く悲鳴をあげる。
ハッと我に戻って

「…なんかあったの？」

と尋ねる。見てみると片手に財布を持っている

「なんかって…チエシヤ猫がいたからびっくりしただけよ」

なにを言っているんだこの子は…

「そんじゃなくて…さっきの大きな悲鳴だよ」

?マークの浮かんでいる彼女に対し、俺は呆れた口調で言った

「…？ …あ！…ああ！！」

一瞬間をおいて思い出したらしい。

「なにがあつたの？」

もう一度尋ねる。

「あ…あのね、冷蔵庫に…」

「冷蔵庫？」

ふと冷蔵庫を見る
特に異常は見られない。

「冷蔵庫がどうかしたのかい？」

彼女は俯いて

「食材がないの…」

「は？」

思わずこの聴力の素晴らしい自慢できる耳を疑った。

「昨日買い忘れてて食材がないのっ！！買いに行かなきゃ夕飯抜きになっちゃう！！」

『ああ…だから財布か…とゆうか…』

「そんなことであんな大声出すなよ。みんななんかあつたんじゃな

いかって心配したんだぞ？」

「え？そうなの？！」

「…ごめんなさい…」とアリスは俯いて言った。

「…てかき、出前とかないわけ？」

アリスとふたり、庭に向かいながら言う。

アリスは片手に財布を持って、俺は冷蔵庫の上にあったクッキーの缶を持っている。

「出前…うちに配達してくれるところなんてないわ…」

「そりゃまた…なんでだい？」

素朴な疑問。

「姉がね…恐いのよ…」

「お姉さん？」

「そう。妄想狂というか…なんて言うか…敵襲だあ！！とか言つて配達に来た彼らを襲うのよ…」

『うわぁ…頼まれて来たのにそりゃないな…』

「そりゃあ…来なくもなるな…」

「でしょ？ヒドい人なんて約1年入院よ？しかも、費持ちは当たり前だけど、うちなんだから。それ以来…うちでは出前は禁止なのよ。」

「お姉さんがいないときは？」

「…試してみたわ…結果は同じよ。姉が何処からともなく沸いてでるのよ！！例え…姉の3泊4日の旅行の日の…2日目に頼んでもね…」

…ホントに人間か？

「今、ホントに人間かよ…って思ったでしょ？」

「ん？…うん」

「人間よ…たぶんね。だって姉妹だもの。」

「ああ…そうだよね」

「？」

キョトンとした顔で見てくる
俺は笑って

「お姉さんが人間じゃないとアリスも人間じゃなくなっちゃうもんね。」

「……！！！！！！なにおう！！」

アリスから繰り出されるパンチを軽く避ける

……そんなことをしながら庭に着いた。

「お姉さん大丈夫でしたか？」

「なにがあつたんだ？」

ふたりして聞く。余程、心配だったのだろう。僅かしか一緒にいないのにここまで心配出来るなんて感動だね。

「……あは」

アリス。苦笑い。

「……？」

「冷蔵庫にね、なにもなかったただけなんだあ」

「全く……。大騒ぎし過ぎだよね。ひとりで」

「……う”っ」

「けど、それだけならよかったです！」

笑顔の白つさぎ。

「ああ、なんともなくてよかった」

少し呆れ顔だが、安心しているような三月。

「えへへー」

と苦笑のアリス。

「あ、それより…買い物行かなきゃだから私、行ってくるねー!」

「ひとりでか？」

「ん？うん!」

「なら自分も…」

「いや!…みんなはお茶会楽しんでくれなきゃ!…買い物はひとりで十分だし!」

「だが…」

「いいからいいから!」

と言ってアリスはそそくさと行ってしまった。

しばらくして…門を出たのであろう《ギィ》と音がした。

「…なんと言つか…」

「いろんな意味で強情ですね」

お茶を飲みながら白うさぎが言う。

「…？」

そこで、ふと…違和感に気付いた。居るべき者がいないような…

「あれ？チエシヤ猫がいませんね」

「追いかけたのか？」

「気配を断っていたのでしょ…うか…気付きませんでしたね…」

「まあ、アリスを追いかけたのだろうな」

「でしょうね。彼のことですからこの家は隅々まで調べたでしょうし。」

「まあ、推測していても仕方がない。」

そこでこの話は終わり…アリス達の持ってきたお菓子に手を伸ばした。

突然の何かが壊れるような物音がしたのは白うさぎと話を始めて数分たった頃だった…。

11日目 3人目

「う”っ…お”も”い”…っ!!」

予想外に買い過ぎた。

5キロのお米を4袋持つてゐるような重さ…。
手には2袋ずつでもうなにも持てない。

カートだったから重さが把握出来なかった…人より少しは力があるから平気!!…て思ってた自分…バーカー

「…やっぱり無…!!」

途中、荷物を一旦降ろそうと、前かがみになった瞬間、荷物が奪われ、しかもその荷物に引っ張られて前のめりにその人物へ突っ込んだ。

ボスッ!!

「……大丈夫かい？」

「?!」

聞き慣れた声に『へ?!』と驚き見上げると

「…チエシヤ猫お?!」

「なんだい?アリス」

「なんであんたがここにいるのよっ?!」

くちをアワアワしながら問い掛ける

その様子を見てにやにやしなから

「気分」

とチエシヤ猫は答えた。

「気分ってあんたねえ…」

「いいじゃん 実際アリスは困ってたわけだし?」

「う”っ…」

まあ助かったと言えば助かったんだけどさ…

「3人水入らずで楽しんで欲しかったのに…」

ボソツと呟いた

「…なに言ってくれちゃってんの?」

「…え」

「俺の楽しみは俺が決めるよ。」

「!」

チエシャ猫が荷物を持って歩きながら言った。

私は置いて行かれないようにについて行く

「…そうだよね…ごめんなさい…」

そうだ…楽しみなんて人それぞれなんだよね…

ちよつとシヨゲていると

「…まあお茶会も好きだけどね?」

「…え?じゃあなんで?」

買い物よりもお茶会にいたほうが楽しいに決まってる…

「ん?キミを放って置けなかったから」

「…なっ!!」

「ん?どうしたの?真っ赤だよアリス」

ニヤツとしてチエシャ猫が言った。

自分でも顔に熱があるのはわかったが、認めたくなくて…

「あっ…赤くなんか無い!!」

と叫んで荷物を2袋奪い取って走りだした。

それは突然…

今まで過ごしていた国での話をしていたときだった…

「ん…なるようにしかならないんですかねえ…」

「そうだな…でも、女王も不在だと言うのにお前まで…！！」
ガシャーン！！

ガラスの割れる音となにか物の壊れる音がした
ふたりして音のほうを振り返ると

窓ガラスが割れている。

ポケットとなにがなんだかわからないという表情の白つさぎに

「行くぞっ!!」

と叫んでふたりはその場所へ向かい走り出した。

「…ふう」

「だから持つって言うてるのに」

「…いい」

「じゃあため息なんかつかないでよね。」

さつきよりも疲れたのであろう不機嫌な声をする。こんなことを繰り返しながら私たちは家に続く坂道を登っていた。

そして…

ようやく家の門の前まで辿り着いた。

門をくぐって玄関のドアまで行く。

「なんか嫌な匂いがする…でも…まさか…」

とチエシヤ猫が言ったが私は意味がわからず
とりあえず荷物を置きに行こうとドアを開けると

「やあ！！おかえり！！君がこの家の主人かい？！」

と、見知らぬ金髪のエメラルドグリーンの瞳のお洒落な帽子をかぶ
った青年が立っていた。

そんな突然の出来事に私は呆然としてその場に立ち尽くしたのだっ
た。

12日目 帽子屋との対面

「ちょっと！！帽子屋！！戻ったんなら片付け手伝って下さい！！」
びっくりして固まっている私たちのところに白うさぎくんがバタバタ走ってきた

「ん？白うさぎ、そんなに慌てて…この家の主人に失礼じゃないかい？」

「はい？なにを言っているんです！！さあさあおねえさんが帰ってくる前に片付け…」

「…白うさぎ。前を見る。」

二階から三月ちゃんが降りて来た。

「…へ？」

白うさぎ目を見開いて振り向いた。薄々気付いてはいたけど本当に

気付いてなかったのか…

「おや？気付いていなかったのかい？！紳士の風上にも置けないね
！！」

つと青年がいう。幼い子に紳士って…

「おつ…おねえさん？！申し訳ありません！！気付かないうえに出
迎えもせずに！！！」

「いや！！出迎えなんていらなから！！気にしてもいないし！！
それより…」

「？」

ちらつと青年を横目で見て、その場にいた全員に聞いた。

「この人…誰？」

「ああ…この人は」

「帽子屋だよ。アリス」

そこで黙りこくっていたチエシャ猫が口を挟んだ。不機嫌なのは続行中みたいなんだけど…なんかさつきと雰囲気が違う気がする…

「三月とお茶会をしていたメンバーのひとりさ。」

「ああ！！お茶会の話をしたのかい？！親しいようだがいつからここに？！ああ！！三月がいなくなっただのはかれこれ一週間ほど前だったかな？！心配して眠りネズミと一緒に探し回っていたんだけどねえ…彼までいなくなってしまうて…っと、話がそれってしまったね！！そうとも！！私がお茶会の主催者さ！！」

…聞いてないし…やたらよくしゃべる人だな…

「帽子屋は僕らと同じ出身なんです」

「あ、やっぱりそうなんだ…」

ふと、彼らが来たときのことを思い出した。チエシャ猫のときは被害はなかったからよかったんだけど…

「アリス。」

「…え？」

「片付けなくてよいのか？冬ならともかく…今は夏だぞ？」

「……ああ！！！」

ヤバイ！！生肉とか生肉とか生肉が！！！！腐る！！

「ありがとう三月ちゃん！！！」

「話なら後でも出来るからな。アリスが心配している部屋ももうすぐ片付け終わる。各自終わったらリビングに集合だ。」

踵を返して三月ちゃんが階段を上り始めたヤバくカワカツコいい…

「ほらっ！！僕たちも行きますよ！！！」

「僕かい？僕はまだ主人と話すことが…」

「三月の話を聞いていなかったんですか？！片付けたら話せますから行きますよ！！！」

「僕にまたあんな肉体労働をさせるつもりかい？！」

「ええ！させるつもりですとも！！全部アナタの責任なんですからね！！有り難いと思ってください！！！」

ギャーギャー騒ぎながらふたりが三月ちゃんの後を歩いて行く。

まあ、帽子屋が白つさぎくんに引きずられて行くってゆうほうが正しいかな？

「行こうか。アリス」

「あ、うん」

残った私たちはキッチンに向かう

片付けている間もずっとチェシャ猫は少しピリピリした雰囲気をもとっていた。疑問に思っていたが終わってから聞けずじまいで、これからどうなるのか不安に思いながらも答えは出ないまま私たちはリビングに向う

私たちが集まったのはそれから一時間後のことだった

12日目 帽子屋との対面（後書き）

途中放棄なさらなくてくださってありがとうございます；；

ぐだぐだな文はとも反省しています…

次回は帽子屋が…たくさんしゃべります！！たぶん！！

13日目 clean room (前書き)

部屋の片付けなんですが…同じようなタイトルがいっぱいになって
しまうので意味は同じでも英語にしてみました (A ^ | ^ ;)

13日目 clean room

「白つさぎ！！テーブルが少しズレているよ！！直したまえ！！あ
あ、三月！！足下の破片を踏まないように気をつけたまえ！！」

「むっ…」

三月が足下を見て踏まないようにしている

「先程から何度も言っているだろう？！先に破片を片付けたらどう
だね？！」

「そんなに言うんでしたら自分でやったらいかがですか？」

呆れたため息混じりの声だ

「なにを言う！！私の手に傷がついたら一大事だよ！！なにせ消毒
しなければならぬからね！！痛いのは嫌なのさっ！！」

なんという自己中…

「白つさぎ、言っても無駄だ。さっさと片付けるぞ」

時間の無駄だと言わんばかりにせつせと動いている

「三月！それは聞き捨てならないね！！まるで私が聞き分けがないと言っているようなものではないかい？！誤解を生むような言い方はやめたまえ！！こんなにも他人を思いやれる者は私以外には滅多にいないのだよ？！」

「わかったから少し黙っていてくれないか？気が散る。」

「なんだね三月！！その言い方は！！！」

ふたりの間に火花が散っている。放って置きたいところだが今にも衝突しそうな勢いだ。

「まあまあふたりともアリスを待たせていることですし…ちゃっちやと終わらせちゃいましょう？。」

そう言い苦笑していると

「「そんなことわかってるっ！！！」」

…みごとなハモリ…

その協調性を少しでもいいから片付けに費やしてほしいな…と思いつつも何か言われるだろうから言わないでおく

ため息をつきながら再び片付けを始めた

三月も再開したようで火花も感じなければ声も聞こえない

たまに物を置くと帽子屋が口を挟む。

「それはそこじゃない!!」
とか…

「…帽子屋…今この場でお前の役に立つ事は記憶力がすばらしくいいことだけだな」

手伝え。と暗に聞こえるのは気のせいではないだろう

「それがなにか問題があるのかい? こうして邪魔にならないところで正しい場所を教えてやっているではないか!!」

「むっ…」

『口を出すより自分でやったほうが早いだろうっ』という心境だろう。顔に出ている

話題を逸らそうと帽子屋に話し掛けた

「帽子屋は記憶力だけはホントにすごいですよね、国で一番でした

つけ？」

「ああ、そうともさ！！私に敵う者などいないね！！ところで……記憶力だけと聞こえたのは私の気のせいかね……？」

あつ……やってしまった！という表情をきつとしているだろう。慌てて取り繕い、笑顔で

「ごめんなさい。気のせい……ということにしてはもらえませんか？」

「仕方ない。一瞬の出来事でも覚えているこの私が素直な謝罪に免じて聞かなかったことにしやろうではないか」

どこまで上目線なんだこの男は……

グダグダになりながら一時間が過ぎた頃だろう。

《コンコンッ》

「三月ちゃん？白うさぎくん？」

もつすぐ片付けが終わりそうな頃にアリスの呼ぶ声が聞こえた

《ガチャ》

「終わった？」

ドアを開けたアリスが部屋を除きこむ

「あ…

「ああ！！主人！！今、白うさぎが運んでいるものを置いたら終わりだよ！！待たせてしまって申し訳ないね！！」

「えっ…あ、いや、大丈夫ですよ！」

ふと三月が白うさぎを見るとぎょっとした顔をした。白うさぎが頬を膨らませて、むっとした顔をしているからだ

「…白うさぎ…大丈夫か…？」

「え？はい。早く運んで終わらせましょうっ」

持っていたゴミ箱を置いてドアへ寄っていった。

見ると帽子屋のマシंगाントークになりつつあるしゃべりを聞いてアリスが少し困った顔をしている

『チェシャ猫はどうしたんだろう？』そう思いながらアリスに駆け寄り

「アリスっ行きましょうっ」

とアリスの服の裾を掴む

「帽子屋。話ならリビングで落着いてしよう」

「ああ、キミらを待っていたんだ！よしっ行くっではないかー！」

帽子屋に連れられる形になりながらリビングへと向かった

14日目 眠りネズミ

リビングに入ると紅茶の匂いが漂ってきた。

「ん…？…この香りはアッサムのミルクティーかな？」

「…？」

「たぶんお前がそう言うならそうだろうな。」

「あ、この香りのこと？」

「ああ、そうだ」

「帽子屋は記憶力とともに嗅覚も素晴らしいんですよ！」

「へえ！そうなんだ！！私全然わからなかった！！すごい詳しいんですね！！」

「ん？まあこれでもお茶会というものを開いているからね！！自然と詳しくなるものだよ！！毎日嗅いでいるから香りもわかるようになるしね。しかし、白うさぎ…僕の嗅覚は紅茶くらいにしか役立たないからね！！勘違いしないでくれたまえ！！」

「そんなこと……！！なにかしら取り柄を持つてるのはすごいことだと思いますよ！！私なんてなにもないから……」

「ん？君になにもないなんてことはないさ！！私はここに来てあまり日はたっていないが少なくとも君の心が広いことはわかるよ！！」

「……え……？」

「ん？私より先に来た彼らがここに住んでいるからね！！少なからず和やかな雰囲気を見せているようだし！！なぜか僕にはピリピリした雰囲気なのけどもね！！ははははは……！！」

「それは貴様の日頃の行いのせいだろう……」

「そうだよねえ……ホント帽子屋、キミは敵を作る性格をしているよねえ……あ、口調もか。てゆうか存在？」

「チエシヤ猫！！いないからどこ行つたのかと思つた」

「ごめんね、アリスく俺がなくてそんなに寂しかった？」

「寂しくはなかったけど……どこに行つたのか気になりはしたわね」

「さて、みんな。立ち話はなんだから折角紅茶も用意してるんだし座つたら？」

「またスルーか……！！」

「それもそうですね。座りましょうか」

あはははと苦笑しながら白うさぎがうながした

それぞれソファに腰掛ける。

テーブルを挟んで両サイドに三人程座れるくらいのソファと配置的にいうお誕生日席がひとつ。その真向かいにはテレビがある。

ここは私の席だ！と言わんばかりにお誕生日席へと向い座る帽子屋。アリスたちは空いてる席へと座る。

「では早速、どういった経緯で今の状態になったのか…まとめましょうか。おねえさんも聞きたい事がありでしょうしね」

にこつと白うさぎが話を始めた。

「では、とりあえず自己紹介から始めましょうか。質問、まとめはその後で」

「…うん」

少し緊張した顔のアリス。この場の空気が少し張り詰めているせいもあるだろう

「僕は”不思議の国”の白うさぎです。身分は伯爵。」

「…伯爵?!…え?白うさぎくんが?!」

「はい」

「…すごい身分上の人なんだねえ…」

少し疑問に思いながらも感心したようにいう

「ええ…」

ふと、白うさぎくんの顔が曇ったのは私の気のせいではないだろう

「次は自分でいいか？」

「あ、うん」

「自分は三月うさぎ。まあ村人とでも思ってくれ」

「次は私だね！！私は帽子屋！！お茶会の主催者で身分は男爵さ！！」

「…男…爵」

「次は俺ね。名前はお馴染みチェシャ猫だよ。公爵家のペット兼、執事ってとこかな？」

「差が激し過ぎない…？」

「そう？まあ、不自由してないしいんじゃない？」

「それも…そうかなあ？」

「そうゆうことにしておきな。考えても無意味だしね」

「では、どういった経緯かと原因と考えられることについて…」

「自分は白うさぎの部屋だな…呼ばれたので行って部屋に入ったらそのまま…」

「僕も同じです。本棚に本を戻そうと立ち上がった…」

「俺は窓から侵入したら足場のところに円い穴があった。とりあえず避けたんだけどなんか動いていてね…逃げ切れなかったんだよね…」

「チェシャの場合…好奇心で飛び込んだのかと思いましたけど…」

「あはっバレた？」

呆れる白うさぎを横目にクスクスと笑う

「私はねえ、数日経っても三月が帰って来ないものだから眠りネズミと共にね城に探しに行ったのだけれど白うさぎの部屋を探していたら眠りネズミがいなくなってしまう、探しに出ようとしたら穴に気付かずに…ね。彼は今どうしているのだから…ん？おお！！眠りネズミじゃないか！！こんなところにいたのか！！」

帽子屋がティーカップの中を見つめながら言う。

「それにしても…なんで穴が…って眠りネズミ?!」

話を続けようとした白うさぎが驚き

「いたのか？」

三月が怪訝な顔をして眉間にシワをよせ

「え？…え？」

アリスはなにがなんだかわからなそうに頭に？マークを浮かべてキョロキョロしている

「やっと気付いたの？」

俺はクスクス笑いながら帽子屋に尋ねた

「全く…人が悪いね君も。いたならいたと声を掛けてくれればいいものを！！君のそうゆうところが嫌いなのだよ！！」

帽子屋がみんなの見える位置に眠りネズミの入ったティーカップを置く

「悪いね。つい、面白そうでさゝミルクティーなら色も似てたしね。」

「…大体ねえ。食べ物もそうだが、飲み物を入れる器に他の物や生き物を入れるなんて理解が出来ないよ！！」

「俺は理解出来るからねえ。キミとは観点が違っただよ」

「…いい加減うるさい。お前らの喧嘩のために集まったわけじゃないんだぞ」

眉間にシワを寄せたまま三月が制止にかかる

「えゝだって…俺、別にそんなこと興味ないし。それに、こっちの生活でも俺は別に構わないしさゝ」

「チエシヤ猫!!お前…」

「…ねえ、白うさぎくん」

「はい？」

そんな彼らを放ってアリスが呆れている白うさぎに話し掛けた

目線の先のティーカップをジッとみている

「抱いてもいいか…あ、違う…みんな人間みたいなのに…なんで眠りネズミくんは動物の姿なの？」

「へ?…ああ?そういえばそうですね…なんででしょう?」

「向こうではちゃんと自分達と同じ姿だったのだが…」

「空気が合わなかったのではないかね？」

「空気って…」

「根拠はないのだがね!!」

「ないんかいっ」

アリスが帽子屋につつこんだ

「まあ、とりあえず…よく寝ていることだし、別に異常は見当たらないから、放置でいいんじゃない？起きたらわかるように誰かついてれば？」

「ん、そうするか。で、誰がついているつもりだ？」

「私がついていよう！…やることもないからね！…」

「あ、そうなんですよね…」

「どうかしたのかい？」

「じゃあ、残るも行くも好きに…ということにしましょう。やる」とない方のほうが多いでしょうし」

「それもそうだな…」

「…なんの…話？」

ふと、声がした。

「え？」

「眠りネズミが寝ている間誰が見ているかという話だよ」

「…僕…？」

「そつだよーおはよう眠りネズミ」

「なんだー！起きたのかい？」

「…うん…ここ…どこ…？」

「アリスの家さー！！国に帰れないらしくてねえ、住ましてもらっているのだよー！！」

「…え…そう…なの…？」

頭に？マークが…かつ可愛い…ネズミも大好きな私にとってはもうこの姿でも全然オツケイ！！なんだけどな…

キヨロキヨロと回りを見渡す眠りネズミ

「あなたがアリス？」

「ほえー！！はいー！！」

動物が喋ってるとなんか違和感が…えっと…なんだろう…なんか…ね…

「…よろ…しく…？」

可愛いからいいや。

こうして新たな入居者が一人（？）増えました。

14日目 眠りネズミ（後書き）

15日目でキャラ設定公開しようと思います）、（

くキャラ紹介く（前書き）

キャラ設定（？）の紹介です
飛ばしてくださっても構いません！！

キャラクター紹介

アリス

年齢：16才

身長：156cm

性格：頑張って敬語を口癖にしようとしているが出来ていない。
ツツコミのようなボケのようなどっちつかず。

特徴：金髪、緑目、青いエプロンドレス

白うさぎ

年齢：6、7才

身長：120cmくらい

性格：一応敬語。適当に片付けてあればなんてことない性格。怒っても何してても可愛い

特徴：白いウサ耳に尻尾。銀髪の赤目。タキシード？

チエシヤ猫

年齢：18才くらい

身長：179cm

性格：基本ノーテンキ。好き嫌い激しい。

帽子屋を嫌いといいつつ実はそれほど嫌ってはいない。お気に入りには惜しみ無く愛(?)を注ぐ。S。公爵家のペット兼執事

三月つさぎ

年齢：15才

身長：151.3cm

性格：几帳面なA型。和服（着物）大好きで毎日着ている。帽子屋が好き…。？医者だったが今はやっておらず、帽子屋と毎日ティーパーティー

特徴：茶色いウサ耳としっぽ。着物、黒い目

帽子屋

年齢：21才

身長：177cm

性格：自分主義者。（自己チュー）喋り出したら止まらない。自分の意見は曲げようとしない（こちら辺がチェシャ猫と合わない）。きつとお金が底をつくまでお茶会をしているだろう。無神経なB型
特徴：金髪、エメラルドグリーンの瞳、お洒落なシルクハット

眠りネズミ

年齢：7才くらい

身長：120cmくらい

性格：とにかく寝てる。かと思いきやたまにすごいツッコミが（あんまりないけど）

特徴：まあるい茶色の耳に長いしっぽ。服は着ぐるみパジャマ

くキャラ紹介く（後書き）

その他の方たちは出てきたところの後書きでお知らせしようと思います

15日目 明日から搜索開始!!

とりあえず、帰る方法はわからず終いでその場は解散になりました。

「あ、そうだ!! みんなに行っておきたい事があるの!!」

「「?」」

全員アリスに向き直る。

「あのね…今は家族がいんだけど…一年くらいしたら帰ってきちゃうと思うの…だからそれまでがタイムリミットだと思って?住んでいいって言ったのにごめんなさい…」

すごく申し訳なさそうな顔でうつむくアリス

「あ、はい」

白うさぎくんが不安げに頷く

「大丈夫だ、アリス。それまでには見つけるから」

三月が心配かけないように言葉をかける

「それにね……」

「……？」

何かと思いチエシャ猫を見ると

いない

「……え？チエシャ猫？」

「ここだよここ」

声のした足下を見るとピンクと紫のボーダー柄の猫がいた

「……え？チエシャ猫なの？」

「そうだよ。眠りネズミがああ姿だからなれるかなって思ったらな

れた」

ニヤツとしてヒラリとアリスの膝の上に乗って言った

「…でも」

「大丈夫。たぶんみんななれるから…おっと論外な人がいたね」

帽子屋を見ながらチエシャ猫が言う

「ん〜どうしたものかねえ」

「帽子屋はそのままですからねえ…恋人とか？」

「白うさぎ…それはどうかと…」

「なんだい?!三月は私の配役に不満があるとでも?!」

「まあまあ」

アリスがさえぎる

「それは後々考えよう」

「それよりも手掛かり探さなきゃ!」

「む…そうだな…」

「心当たりなんてありませんしねえ…」

「…図書館とかにあるかな…？ないよね…」

「図書館か…手掛かりはあるかもしれないな明日にでも行ってみるか？」

「そうしましょう！！私もそろそろ学校あるし、宿題も終わらせなきゃー…」

「…がっこう？」

うなだれるアリスに三月が尋ねた

「え？同じ歳くらいの人が一緒に勉強する場所だよ？そっちにはないの？」

「ないな。こっちはそんなものがあるのか…」

「うん！ひとそれぞれだと思っけど楽しいよ！！」

「そうか」

ふつと笑う三月

あはゝ和むわ…

と幸せそうな顔を浮かべるアリス

「ところでアリス！！」

「へ？！はい！！」

「待てど暮らせど夕食が出てこないのだがまだなのかい?!」

「…は?」

帽子屋に名前で呼ばれたことの違和感ととても自己中なことに戸惑い一瞬理解出来なかった

「帽子屋…夕食は作らねばないぞ…」

三月が呆れる

「なに?! そうなのかい!?! そうゆうことは早めに言いたまえ!」

「えっごつごめんなさいっ」

反射的に謝っちゃったけど…私悪くないよね?!

「過ぎたことはいい!! 来たまえ!! 夕飯を作ろうではないか!!」
そう言い、キッチンへ帽子屋が私を引きずっていった

「アリス!」

「ひあい!」

「キッチンはどこだい?! 案内したまえ!」

んなー…

帽子屋についていけるのか不安になった私。だってA型だもん…見るからにB型じゃん…帽子屋…

16日目 こうして夜は更けてゆく

「うまつー!!」

帽子屋が作ったハンバーグを食べて信じられないという顔をしているアリス

今なにをしているかって？ 思った通り晩ご飯食べてます

「帽子屋の手料理久し振りに食べました〜 相変わらず美味しいですねー!!」

ニコニコ、はむはむ食べてる白うさぎくん。 あれ？ うさぎってベジタリアンじゃ… って人っぽいし関係ないのか…

「ほんと美味しいよね〜…」

真剣にハンバーグを見ながらチエシヤ猫が言う

三月ちゃんはただ黙々と食べてて、眠りネズミくんは小さいサイズのものを作ってもらい三月ちゃんの横で必死に頬張っている

そんなに頼張らなくても誰も取らないって…

思わず笑ってしまう

「ふゝ…美味しかった!!」

「そう言ってくれると光栄だね!!作り甲斐があるというものだ!!」

なんか帽子屋がランランしている

「じゃあ俺片付けてくるね」

「あ!!!私も!!」

まとめてあるお皿を持ってスタスタと歩いていくチエシヤ猫を追う

「んゝ?別にいいのに」

「いや!!私の道理がゆるさないから!!」

「そうなの?」

「うん!!」

「ふん?じゃあ洗い終わったお皿拭いて片付ける係りね」

「…うん?」

普通逆じゃないか?と思ったが頷いておいた

お皿を拭いているとチェシャ猫に声を掛けられた

「アリス…」

「…え?」

「なんで拭くだけなのにそんなにビショビショになるの?」

「え?普通なんない?」

「なんないなんない」

食器を洗いながら横目でアリスを見るとなぜかビショビショだった

「え……？」

「どうやって拭いてるの……」

「ふ……ふつ……」

「ん……」

眉間にシワをよせるチエシャ猫

「アリス……！」

「ひぎやつ……！」

拭き方について悩んでいるといつ入ってきたのか、突然帽子屋に声を掛けられた

「なんだね？その叫び声は……まるで猫みたいだね……おっと失礼……！」

チエシャ猫は無視で洗い物を続けている

「……と、こんなことを言いに来たわけではないのだよ……！」

「はい？」

「お風呂を借りてもいいだろうか？」

「あ、いいですよ、好きに使って」

「本当かい！！とりあえず沸かし方がわからないからついてきたまえ！！」

そう言いアリスを引きずってゆく帽子屋

一日に何回やれば気が済むんだろつか

その場には三月ちゃんと白うさぎくんもいた

「えっと、このスイッチを押して、この上下キーで温度調節すればOKですー！ー」

「なるほどー！ありがとうアリス。もう行ってくれて構わないよ！」

「…はあい」

キッチンへと戻るアリス

「ただいま〜？」

「ん？おかえり〜」

見るとチェシャ猫がお皿を拭いてしまい終わったところだ

「終わっちゃったの？」

「うん。見てみ〜全然濡れてないでしょ」

胸を反らせたポーズで両手を広げてみせる

「ん〜…なんで？」

「考えてみたけどたぶんアレじゃない？拭くときに皿に溜まっていた水がぼたぼたぼたと」

「え？みんななんなの？」

「なんないなんない。まあ無事解決だね〜必要なのは注意力かな」

「む〜…」

片付けも一通り終わったのでリビングに戻る

ソファに座りながらテレビをみている三月ちゃんがいた

「ん？アリスか」

「何見てるの？」

「さあ…わからんな」

「ふ…ふむ？」

ふたりでテレビに釘付けになっていると、ソファにドスツとゆづ音が響いたチエシヤ猫だ

「あれ？白つさぎと眠りネズミは？」

そういえば見当たらない

「ああ、あいつらなら帽子屋と風呂に入っているぞ」

「え”！！」

「ふ…ん？男同士で入ってなにが楽しいんだか…俺なら女の子と入るのに」

「はあ?!」

思いっきり眉をよせるアリスと呆れて黙る三月

「ん? なんならアリス、俺と入る?」

「は? ヤダ!! ひとりで入れ!!」

「そんなに拒絶しなくても…隅々まで洗ってあげる」

「なっ…変態!!」

置いてあるソファを投げ付ける。あははと笑い避けるチエシヤ猫

「アリス…相手にするな」

「ん…うん?」

三月の横にアリスが座る

「ひどいなあ」

チエシヤ猫まだケラケラと笑っている

「おや? なにやら騒がしいね?!」

「お風呂いただきました」

お風呂をあがった三人が入ってきた

「じゃあ俺入ろつと」

スタスタと部屋に向かうチエシャ猫

部屋から出てくると

「覗いちゃダメだよ」

「誰も覗かないから…」

そう言いお風呂へ去っていった

17日目 図書館デビュー（前書き）

遅くなって申し訳ないですm（| | ;）m

ではではお待たせしました

どぞー

17日目 図書館デビュー

たくさんの本、棚が立ち並び、それに伴うたくさんの人達。夏休みということもあるのだろう、いつもは静かな図書館はザワザワと賑わっている

その中、アリス達は案内板の前で立ち尽くしていた。

「…どこ探せばいいんだろう?。」

来てみたはいいものの、どこを探せばいいのかわからない

「とりあえず…不思議の国の本を手当たり次第探し当てればいいんだよね…童話かなあ…」

四人は童話コーナーに向って歩き出す

「ドウワとはなんだ?。」

三月が話しかけてきた。見ると、その後ろ辺りで白うさぎくんもこちらを見上げている

「え?。」

「俺らの国には”ドウワ”なんて言葉がないからね。知らないんだよ」

チエシヤ猫が説明する

「あ、そうなんだ…えっとね…物語ってわかるかなあ…？」

「うん」

「あ、それなら早いや。物語をね、子供向けにした感じ？」

「ふむ…」

「子供向けの絵本みたいなのですか？」

「そんなのだと思うけど…今度調べとくよ」

「あ、わざわざすみません」

ハタッと慌てて白うさぎくんが謝った

「いや、謝る事じゃないから大丈夫だよ」

アリスが笑って返した

「アリス、とてつもなく大量にあるんだが…」

「少しでも使えそうなやつは持ってきて」

「お姉さん、これとこれを…」

「はいはい。じゃあこれに入れちゃって」

持っていた図書館用の袋を広げる

「アリス、これ借てもいい？」

チェシャ猫が歩み寄ってきた。

「それ料理の本じゃない…」

「今日留守電してる帽子屋のためなのに」

「そんなこと言ってお前が読みたいだけだろう」

本を選び終えた三月が口を挟む

「バレたー？」

あはーっと笑うチェシャ猫

「これで今日は終わりにしとこうか。仕方ないからチェシャ猫も借りるなら入れて」

パツと顔を明るくするチェシャ猫

「わあい　ありがとアリス大好き!!」

アリスに抱きついて喉をゴロゴロ鳴らすチエシャ猫

「!!」

びっくりして身体を強張らせるアリス

「こらっ！チエシャ猫！！人目につかないとこでやれ!!」

ギョツとした顔でチエシャ猫に注意する三月

「えゝ？じゃあ人目につかなきゃいいんだね」

「ん？まあいいんじゃないか？」

ふたりのそんな会話の中、全く動かないアリスを白うさぎくんが顔を覗きこんだ

「…………おねえさん？」

アリスは顔を真っ赤にして硬直している

「アリス?!大丈夫か?!真っ赤だぞ!!熱でもあるのか?!病院に…いや、自分が…」

「え！！あ！！大丈夫だよ！！病気じゃないから！！」

慌てふためくふたりの後ろで声がした

「コホン。館内はお静かに。」

いかにも教育ママさんの格好をした図書館員さんに睨まれた

「「ご…ごめんなさい」」

「それと、閉館10分前ですので、借りるならお早めに」

そう言い残し、立ち去っていく

「じゃ…じゃあ借りてくるね」

「あ、ああ…一緒にいく」

「え、待ってたら？」

「いや、アリスがいないときがあるかもしれないしな」

「あ、そっか…カウンターに本と貸出カードを出すだけなんだけど…じゃあ一緒に行こうか」

ニコツと微笑みかけるアリス

「ああ」

と、三月ちゃんが頷いた

「結構簡単でしたね」

帰り道、白うさぎくんが話しかけた

「でしょ。これからは一人でも大丈夫だね」

笑いながら話すアリス

もう六時になるというのに辺りはまだ明るい

「帽子屋怒ってるかなあ」

ニヤツと笑うチェシャ猫

「いや、たぶん平気だろう。コレもあるしな」

「さっき言ってた…帽子屋に留守番させると暴れ出すって本当…?」

不安げに尋ねるアリス

「それは飛躍しすぎだが、まあお土産買って行けば大丈夫だ。」

「そっか　なら平気だね」

「帽子屋、それ好きですからね」

「ああ」

「そういえば、それなんなの？」

「これは…」

「帰ったらのお楽しみだよ」

三月の言葉をチェシャ猫がさえぎる

「えっ…」

アリスが不満げな声をあげる

「まあ、帰ったら教える」

「うん!!」

素直なアリスを見て三月が微笑んだ

18日目 アリス、ドキドキ ハラハラ…恐怖の一夜

「いやあああああ……!!!!」

アリスの悲鳴が屋敷中に響き渡った

高笑いをする帽子屋

眠る眠りネズミ

オロオロしている白つちぢ...

何かに魅入ってしまった三月...

この屋敷に一体なにが起こったのでしょうか...

「い……いやあああああ！！」

アリスは三月が帽子屋に手渡したソレを見て悲鳴をあげた

中身は半分取り出してあり、ひとつは三月が釘付けになって少しいじったりしながらも魅入っている

アリスなどお構いなしだ

「おねえさん大丈夫ですか……？」

白うさぎが心配そうにアリスを覗きこんでいる

ふう…アリスはこの物語が始まってから白つさぎに心配されるのは何回目なんだろうか…

「白つさぎくんっ…」

アリスが泣きじゃくりながら白つさぎくんに助けを求め…どんっ！！

「あっっ！！！」

「白つさぎ！！一緒に観賞しないかい？！これがまた素敵そうだね！！！」

高笑いをしながらあまりにも興奮し過ぎている帽子屋に弾き飛ばされるアリス

「イタタ…」

どうやら頭をぶつけてしまったようだな
大丈夫かい？アリス

アリスは頭を押さえながらもむくりと立ち上がる

そのアリスの目に飛び込んできたのは三月がソファに座って見ているソレだった

「ぎゃあああああ!」

もはや涙は止まらない。

アリスが今までずっと見まいと努力していたものが水の泡となったの……

そんなアリスを知ってか知らずか帽子屋は興奮して鼻息を荒くしながらだいぶ年下の白うさぎにソレについて熱く語っている

白うさぎもともとソレには興味があつたらしくアリスのことは何処へやら夢中で聞き入っているようだ

今の状況を表すならそうだな……

『アリス…THE 放置』

この言葉がピッタリだな、うん。

「みんなひどいよ……」

うう…と悲痛の声をだすアリス

「お財布渡してなにか買ってきたと思ったらさ…中身教えてくれな
いし…帰ってきてシヨンボリしてる帽子屋にさ、ソレを見せた途端
嬉しさのあまり発狂するしさ…突き飛ばされるわ、シカトされるわ、
放置だし…みんなひどいよ…なんでそんなにソレがいいのよ…」

ブツブツしゃべりながらアリスがいじけてる
…が、そんなことはお構いなし

「もう…！なんでそんなものがいいのよ…！おかしいわよ…！」

瞳いっぱい涙を浮かべながら抗議するアリス

そこでやっと帽子屋が反応した

「…そんな…もの…だと？」

笑みを浮かべながらの般若のような表情で帽子屋がこちらをくるう
りと振り返る

「ひっ…！」

あまりの恐怖にアリスは引きつった声をあげた

「これのどこを見てそんなものと呼べるんだい?!どこをどう探してもこんなに素晴らしいものはないね!!それをそんなものと呼べる君の目は節穴さ!!腐っているよ!!出直してきたまえ!!」

間髪いれずまくし立てたあと、シッシツと手で追払う仕草をする帽子屋

そしてすぐに「ああ悪いね」と白うさぎにまた語り始めた

アリスはというと拳を硬く握りふるふると震わせている

「もう知らないんだからっ!!みんな出てけー!!」

キツと帽子屋を睨み付け、ダダダ―ツと走り去ってしまった

「少し…やり過ぎでは…」

去って行くアリスの背中を見つめる白うさぎ

「ん?ああ!!こいつかい?!こいつはねえ…」

「え…あ、いえ…」

話し始めた帽子屋は止められないので再び聞き入る白うさぎ

三月は気付いているのかいないのか…見る限り気にも止めていない

ようだ

「うわああああん!!」

アリス的最终手段を使っても止められなかったアリスは自分の部屋に戻ればいいものの、適当に近場の部屋に入っていた

もちろん作者の作為的に

「なによっ…みんなして…」

ドアの前でうずくまり縮こまるアリス

「…どうかしたの？アリス？わざわざ俺の部屋にくるなんて」

誰もいないと思い込んでいたアリスはビクッと肩を震わせた

「アリス？」

「チエシャ…猫」

顔を上げるとジーパンに半裸のチェシャ猫がいた
今まで寝ていたのだろうかところどころ寝癖がついている

「泣いてるね、こつちおいで」

寝ぼけた顔をしていたがアリスの異変に気付いたのだろう
手を引いてベットに座らせた
アリスはもう、されるがままで

「なにがあつたの？」

アリスの横に座り頭を撫でながら尋ねる

「…みんながね…ひどいの…」

しゃっくりまじりの震えた声で話すアリス

「へえ？」

「あたし…ホラーダメだつて言ってるのに見向きもしないし…あたしそっちのけでお構いなしだし…白うさぎくんまで放置だし…終いには帽子屋に追い出されるし…」

やばい…また涙出てきた…

袖で涙を拭おうとするとチエシャ猫に顔を持ち上げられた

ぐいっ

えっ…

「ひゃっ…」

涙で視界も思考もがぼやけていてなにが起きたのか一瞬理解できず
湿った猫のようにザラザラした舌のようなもので涙を舐めとられた

「やつ…ちょ…なに…」

チエシャ猫から離れようとグッと胸の辺りを押す

「じっとしてよ」

さっきまでの落ち着かせるような声とは違う…ゾクッとするような

声で囁かれたと思えば

両腕を頭の上でまとめ上げられ

ドサツと

ベットに押しつけられた

「…え…ちよっ」

まだ舐め続けようとするチエシヤ猫に抵抗しようと腕を動かすが無駄で

避けようと顔を背けるも片手で向き直される

まだ少し動かせる足をバタバタと動かしながらギュッと目をつぶると

足が不快だったのか馬乗り体制からのし掛かれた

ふと、顔にあの舐められる感触が無くなったのでおそろおそろ目を開けると

ジッと見ているチエシヤ猫と目が合う

みるみる顔が赤くなるのが自分でもわかる…いや！！仕方ないよ…
うん…あんなことされちゃ…

パツとチエシヤ猫から目を逸らすと

「泣きやんだねえ、よかったあ」

安心したような、すごく優しい声が聞こえた

「え…」

見るとにこっと笑っているチエシヤ猫の顔が…

落ちて来る最中だった

ドサッ

「ぐー」

真横に倒れたチェシャ猫は…吐息をたてながら眠りについた

びびびびっくりしたーっ

目を見開きっぱなしのアリス

…とりあえず落ち着こう

深呼吸

すーはーすーはー

「ふう…」

静かになったな…
隣りの部屋から流れて来る音声以外静かなものだ帽子屋も見入っているのだろう

とりあえず…動けないし…

チラッとチエシャ猫を見るが動きそうもない

寝よう。

危害もきつとないだろうと思い、
なによりも漏れて来る音から逃げ
たくて…

アリスは目を閉じた。

おやおやふたりとも…そんな格好で寝ては風邪引くだろうに…布
団をかぶせてあげようか

ぴんぴんぴん

よし、おやすみアリス。良い夢を

18日目 アリス、ドキドキ ハラハラ…恐怖の一夜(後書き)

自分で期限決めてるにもかかわらずすっかり更新が遅くなってます…

直さなきゃ…orz

今回チェシャ猫の服をはだけたパジャマにしようかジーパンに半裸にしようかで悩んでました(そんな無意味な)

まあ結局一度してみたかった半裸なのですが…

あまり意味はありませんでした(^| ^:)

では今日はこれにて失礼しますゝ

19日目ベットにいるのはだあれだ？（前書き）

大変遅くなりました

申し訳ございませんm (;) m

19日目ベットにいるのはだあれだ？

ぴちちちち

「ん…」

小鳥のさえずりとカーテン越しの朝の木漏れ日に目が覚める

……予定だった

だが実際アリスはあまりの窮屈さに目が覚める

なんでこんなにきついんだろ…

確か昨日はチェシャ猫と…

えっ…もしかしてこの後ろから抱き締めてる手はチェシャ猫！？

少し赤くなりつつ、とりあえずベットから出ようと、横向きの体制からぞもぞ動くと、なにかお腹の辺りにあたる感触…。

空いている両手で布団をめくり見ると、それは見慣れたピンクと紫のシマシ…マ…

え？チエシヤ猫？可愛いなあ…こんなペット欲しいなあ…
ん？ちよつと待てよ…猫になってる…？てことは？

「後ろの誰よ…？」

考えられるのは帽子屋と三月ちゃん

大きさに考えて白うさぎくんはないし…

けど…抱え込まれてることを考えると…ぼーし…や…？

うげ…不快。

てゆーかなんでこの部屋にいるのよ。リビングにいたんじゃないの？
たのー？

よし、昨日の恨みもあるし気を使う必要もないな…腹パンチでも食
らわしてやる

ゴスツツ

考え付いたと同時に後先考えず肘鉄を後ろ目掛けて放つアリス

「ガハッ?!」

……

………

………え? 誰?

…聞こえた声は癪にさわる帽子屋の声ではなかった

なーんか聞いたことあるような無いような…

「あ”ー…?」

頭をボリボリかきながらむくりと起き上がった…その男は数秒の間をあげた後ハッとしたように声をあげた

「っ！ー！ヤベっ！ー！そのまま寝ちゃったのか俺！？」

頭を抱え込み、どうしよう…どうしよう…とひとり焦っているようだ

「…………？」

なんか見覚えが…

「…緑…お兄ちゃん…？」

「……………！！」

呼ばれた彼は体をビクツと硬直させながら、恐る恐るこちらを振り返った。

「や…やぁアリス？目覚めはいかがかな…？」

にこつと笑顔だけど青ざめてるよ…

「……………それより…なんでここに…」

「いやっ…それは……」

「……？」

うわーっアリスの眉間にシワが…っ
ヤバイヤバイヤバイヤバイ

「いっいや、下心があつたとかじゃないんだっ！…ただ、

人肌恋しかつたとゆうか…っで違う！！違うっ！！ジョークだ！！
アリス違うんだ！！お願いだからそんな気色悪い物を見るような目
で見ないでくれ！！そんな端に…俺から距離をとらないでくれ！！
！！」

腕を伸ばして待ってくれーのポーズ…今にもなんか泣き出しそうだ。

「…ぷぷっ…」

その光景に思わず笑ってしまう

「え？」っとゆう表情でこちらをみる彼

「いや、前にもこんなことあつたな〜と思って」

ふふっとなんか笑いながら話すアリス

「げ…マジかよ!？」

そんなことあったかなあ…とあげていた方の手を頭にもっていく

「あつたよ、確か私が小学生のとき?かな?お兄ちゃんが私のベツトに入ってた緑お兄ちゃん見つけて

「お前はロリコンかー!!!!!!」って

「…あははー」

思い当たる節があるのか苦笑いしている

「…ところでさ、アリス」

「ん?なに？」

「枕元にウサギがいるんだけど…飼い始めたの?」

「…え？」

バツと上にある枕元をみると確かに茶色いウサギが寝息をたてている。なんて無防備なの…撫で回したい…

「……………」

「…アリス？」

振り向いてからの長い沈黙に不審に思ったのか彼が声をかけた

でもなー、寝てるの邪魔しちゃダメだよー！我慢よアリスー！あ
あー！でもなにあのふわふわな栗色とも言えない茶色ー！撫で回し
てくださいって言うてるようなものだわー！ああでも…

「アリスー！」

「ぴよー！！？」

あれ？私、今変な声出し…た？
恥ず…！！！！

「ぴよってなんだよ…で、あのウサギは飼ってないの？じゃあ山
に返しに行くけど？どうせアリスは無類の動物好きだから返せない
だろうし？」

「あつ…えつ…！」

これはマズい！！バレるわけにもいかないし捨てられたらそれこそ
どうなるかわかんない！！

「あつ…！違うの…！友達…！そう、友達から預かってるの…！」

手をバタバタ動かしながら咄嗟の言い訳を口走る

「…………へえ？」

ヤバい…絶対不審がられてるよ…
案の定彼はアリスに質問し始めた

「その友達はいつ帰って来るの？」

「えと…………、一年後くらい？」

「長いなあオイ……」

「お父さん達もそれくらい帰って来ないって連絡あったし……いいかなあ……って……」

「赤は？」

「おねえちゃんね、一年くらい友達と旅行行くんだったって」

「ふうん、で、そのウサギは誰から預かったの？」

「…………おねえちゃんと旅行に行ってる友……達…………」

アリスの目線が泳いでいる

「ほほう。じゃあ今から赤に電話して確かめて見ようか」

「えっ……!」

青ざめた

「ん？なんか問題でもあんの？」「え……いや……」

「そう？」

耳に携帯を当てる彼

「あ、もしも……」

「……にぎやああああああ……！！！！」

奇声をあげながら彼から携帯を奪いとった

「おねえちゃん！！違うの！！」

すかさず耳に携帯をあて話出す

「アリス」

「これには色々と訳が！！！！！！」

「アリス」

彼が肩をちよちよいと叩く

「なによー！！」

半狂乱になりながら彼を振り返る

「画面、見てみ」

「え？」

「画面。」

む、っとしながら携帯の画面を見ると

S A・D A・K O

「……………きゃああああ！！？」

「うは。良い反応」

当然通話中の訳もなく…

「なにすんのよ！！信じらんない！！騙したのね！！出てけー！！」
涙ぐみながらそこらへんにある時計やら枕ならを投げ付け追い出そ
うとするアリス

「ちょー！！痛ー！！わかったー！！わかったからー！！」

「わかったなら出てけー！！！！！！」

「痛いー！！目覚まし痛いー！！わかったー！！出てくからヤメっー！！痛
ー！！」

ドアまで追い詰めたアリス

「はあっ…はあっ…」

「ちょ、まあ落ち着け……出て行く…部屋から出て行くから…これだけは聞いてくれ…」

「……なによ」

目覚しを片手にあげて、いつでも投げられるポーズ

「ウサギに肉球があるって本当か？」

手をわきわきさせながら真顔で言われた

「ないわー！ー！ー」

「うおっ！ー」 バタン。ゴン。

「……まあ…品種によってあるのもいるんだけど…とにかく、人の姿の時に見つからなくてよかったあ…」

ふうつとため息をつくと後ろから声が聞こえた

「…ったく…朝っぱらからうるさいなあ………」

「あ、ごめんチェシヤ猫」

「いいよ別に」

くわつとあくびをする

う…のんきだけど口調が怒ってる…

「それにしても、奴は何者だ？」

いつの間にか横にいた茶色いウサギ…三月が問い掛けたぶん、さっきの騒がしさで起きたのだろう。ごめん。

「んとね、お兄ちゃんとの友達だよ。よく一緒に遊んでたんだ」

「ふむ。」

「それより、…なんで三月ちゃんたち動物になってるの？」

「ん？なに？…いつの間に…」

その反応だと今気付いたのだろう
チエシヤ猫もそうみたい

「昨日の夜までは平気だったのにね？」

三月の身体が一瞬光った。

しかし、その光も一瞬で弾け飛ぶ

「むっ、…むむ？」

「え？どしたの？」

「戻れない…ね、」

「うむ、」

「え……」

三人の間に妙な緊張が走る

「まあ、この姿でも問題はないし、いいんじゃない？」

チエシヤ猫がため息をついた

「まあ、それもそうだな……あ？」

「あ？どうした？」

「アリス、先ほどの奴はどこにいる？」

「え……たぶんリビング」

「白つさぎと帽子屋はどこにいる？」

「え……あ……！……」

「最後に見たのはリビングだ。バレたら色々とマズいんじゃないか？」

「どうしよう……！お兄ちゃんに伝わる前に口止めしなきゃ……！……」

「とりあえず、急ぐぞ……！開けてくれアリス……！……」

「俺も。場所には困らないけど、猫社会は面倒だし、家があるにこしたことはないからね」

アリスがドアを開け、三人（？）で駆け出す

「……あ、猫のままで家にいれば問題はないのか…」

走り出してすぐ思い付いたようにチェシャ猫が言う

「うちんちペット禁止なの!!」

「野良猫が居着いたとか」

「お母さんが帰ってきたら殺されちゃうわよ!!動物大っ嫌いだから!!」

「うげえ…」

「待て、大丈夫なのか？」

それを聞いていた三月ちゃんも話しはじめる

「なにがっ」

「臭いとか毛とか」

「帰ってくる前にあなた達を返せたらなんとかなると思う!!」

「とりあえず今は目の前の問題ってね」

リビングのドアが見えてきた

走っている勢いに任せてアリスは思いっきりドアを開けた

20日目 おバカさんが一人…

開け放ったドアの先に広がった光景に…アリスは息を飲んだ

だって…動物姿ならまだごまかせるけど…

人型だと、いろいろ問題が起こるはずじゃないか。

例えば、家族がいない間に男を連れ込んで…！

とか、まあよくあるパターンだよな。

なのに…

なのにつ…

なんで呑気にお茶飲んでんのよっ？！

少しはなんかないわけ？！

どうなのよー!!

「ん？どうしたんだいアリス？息を切らせて」

「どうしたって…」

バレたら大変だっと思って焦ってた自分がバカみたいじゃない…

なに…この無駄な努力…

なんか呆れたら疲れてきたな…

「…アリス、大丈夫か…？」

私にも聞こえるかわからないくらいの声で三月ちゃんが話し掛けた

「うん…」

アリスは緑から見て不自然じゃないように頷いた。

三月ちゃんがバレル危険があるにも関わらず話し掛けたんだ、余程
疲れた顔をしていたんだろう

私は、はあ…と溜め息を着いて空いているソファに腰掛けた

テーブルを挟んで向かいの三人掛けのソファには帽子屋

そのふたつのソファの間、テーブルの端のひとり掛けのソファには

緑が座っている

三月ちゃんは帽子屋の方へ

チエシヤ猫は私に着いてきた

「疲れた顔をしているね？大丈夫かい？」

「んゝ大丈夫」

「さっきまではなんともなかったのにね？お兄さんが癒してあげようか？さあ！！」

そう言い両手を広げる緑

「んゝ遠慮しとく」

「なんで？！小さい頃は飛んできてくれたのに！！」

ショックを受けた顔をして両手を広げたまま固まっている

「つーか、疲れた顔の原因はお前じゃー！！それに何年前の話よ……はあ……」

呆れて言葉も続かない

「年上に……仮にも兄ちゃんの友達にお前はないだろ、お前はー！！」

「お前なんかお前で十分じゃー！！うわーん」

「…と、まあ、そんなことは置いといて…」

ほんといい性格してるよなコイツ…

アリスがわなわなと拳を震わせる

にも気付かず緑は話続けた

「…さつき、そのウサギ喋ってなかった？」

…辺りが一瞬沈黙した

アリスは始めは言葉の意味を理解していなかったが今はどうしよう…とゆう顔のまま固まっている

三月ちゃんなんて冷や汗ダラダラで逃げ腰だ

時間的には数秒…

私達にはとても長い……

その沈黙を破ったのは帽子屋だった

「君はなにを言っているんだい？」

みんなの視線が帽子屋に集まる

「常識的に考えてウサギが喋るはずがないだろう!!暑さで変になったんじゃないかい？」

「んゝ…まあ、それもそうか…」

少し考えながらも納得する緑

帽子屋に常識を説かれたくはないが、この時ばかりは感謝した

相手が納得したのに三月ちゃんも安心したのか帽子屋の膝の上でくつろいでいる

アリスの顔もほっとした表情になった

そんなアリスに気付いた帽子屋はアリスに向かってウィンクした

私だって役に立つだろう？

と語っているのが聞こえるようだ

アリスはそんな帽子屋に向かって笑いかけた

「え？なになに？なんでそこいい雰囲気だしちゃってんの？実は付き合っちゃってんの？ねえねえ」

ちょっと雰囲気が変わったのを緑が察知したのか興味深げに聞いてきた

「つつ…付き合ってたなんか!」

「ありえないね!!!なぜ僕がこんなちくりんと付き合わなければならんだい?!僕にも好みというものがあるのだよ!」

「んなあ?!」

少し顔を赤らめたアリスが帽子屋の言葉に別の意味で赤くなる

そんな事も気にせず、緑は帽子屋に疑問をぶつける

「で、そうじゃないとしたら、なに?今のやりとり?」

「それはだねえ!」

興味津々とゆう彼に、帽子屋は自慢げに答える

「三月が喋ったことをうまく誤魔化せたからさ!」

「帽子屋あああああ!」

……ほら、さつきもかばってくれたわけだし?少し不安を残しつつも、そこまでバカじゃないだろうと信じて見守ってたんだよ?

なのに貴様あああああ!」

私と三月ちゃんは跳ねるように立ち上がり声を張り上げた。

「あ、やっぱり俺の空耳じゃなかったんだね」

ハット帽を傾け、顔を隠してうつむく帽子屋に対し、緑は満面の笑みだ

はあ……これからどうしよう……

私は溜め息をついた

20目 おバカさんが一人…（後書き）

「う…う…うめんなさああああああ
…。…。…」

21日目 芋虫

取りあえず、緑は夕飯を食べて行くことになった

今までの事と進行状況を話していたら長くなってしまったからだ

今日のメニューは帽子屋の作った野菜たっぷりカレー。
本人曰く、夏バテ予防はバランス良く食べる事だそうだ

三月ちゃんとチェシャ猫の分も盛ってあるけど…食べて平気なのか
…？

「ふうん、そんなことがあったわけね」

カレーを口に運びながら、一通り聞いた説明の感想を漏らす

「けど、家族が戻ってくるのは一年後くらいだろ？それに、あくまで予定だからもっと早いかもしれない。帰り方がわからないまま帰ってきたらどうすんだ？」

「う…」

緑の言う事はもっともだ…思いはしたけど考えないようにしてたこ

とをバツサリ言われる

「俺は助けらんないぞ？」

「わかつてるわよ……」

緑を一睨みすると目があった。

最初っから助けなんて求める気ないし。

ジカジカ
自意識過剰め……

と、心の中で呟いた後、目線を逸らす

食べ終えたらしい緑がスプーンを置く

かという私はまだ半分くらいしか食べれていない

「気にすることはない、なるようにしかならないのだから」

帽子屋がすまして言う

こいつ……さっきの自分のこと言ってるだろ……

「そうだとしても、一番被害が出るのは君達だよ？あの人の気分が悪かったら殺されかねないし……ねえ、アリス？」

「うちの母をなんだと思ってんのよ……」

「え？女王様。」

「コノヤロー」

ピクツとチェシャ猫と三月ちゃんの耳が動いたのを私は見逃さなかった。

帽子屋も様子は変わっていないように見えるが、少し目付きが変わった

……え？なに？
なに？この雰囲気？

「ん？俺なんか言った？アリス、麦茶おかわり」

さも当然というように麦茶の入っていたボトルを差し出す

「自分で取りに行きなさいよっ 食べ終わってるんだからっ！！」

「いいの？俺にそんなこと言って…お兄ちゃんにばらしちゃうよ？」

こっ…コノヤローッ

「っっっ！…取ってくればいいんでしょっ！！」

ボトルを奪い取り、ドスドスと音を立ててアリスはキッチンへと消えていった

「さて、邪魔なアリスが消えたところで…話を始めようか。…不思議の国の諸君？」

「「「
…!!?」」」

目付きの変わった緑に三人(?)は身構える

「ああ、アリスなら心配いらないよ。しばらく戻って来れないからね」

「お前は一体…」

三月の問いは緑に遮られた

「おつと、先に質問するのは俺だよ？君達が勝手に落ちてきて予定を狂わせてくれたんだからさ」

フツと皮肉めいた笑いを見せた

その姿はいつの間にやらシルクハットに燕尾服の姿に変わっている

「ふんっ、怪しいと思ってたんだよねえ…この状態じゃアリスのとこへも行けなさうだし、この空間隔離してるでしょ」

「ああ、無駄な努力はしないほうがいいぜ？どうせお前らだってまだ人型に戻れねえだろ？」

「ふん…アナタのせいだったんだ？この借りは高く付くよ？」

「ふん。やれるもんならやってみな」

睨みつけるチェシャ猫に対して不敵な笑いを見せる

「ふう…くだらない茶番はどうでも良いのだよ。」

二人の間に帽子屋が割って入った

視線が帽子屋に集中する

それを確認した後、緑を見据えながら帽子屋が話し出した

「さて、諸君。本題に入ろうではないか。…君の質問はなんだね？」

組んでいた足の上に軽く手を組んで乗せた

「偉そうな態度は昔から変わってないなお前」

鼻で笑いながら話を続ける

「なっ?!」

帽子屋が声をあげると、またも緑が遮った

「お前が俺のこと知らないのは当たり前だからな」

そう言った緑に怪訝な顔をする面々

「さ…で、本題だけど…」

三人がゴクツと息を呑む

「あ、いやいや、そんなに緊張しないでよ。今向こうがどんな状態か聞きたいだけだからさ。」

軽い言葉を装ってはいるが、目は少しも笑っていない

「それを聞いてどうするつもりだ？ 貴様が何者かもわからないまま答えられるわけ……」

「だからさ、」

緑がパチンと指を鳴らす
途端、三月が喉をおさえた

「?!」

「ちょっと黙ってててば」

三月は緑を睨みつつ何事か喋っているようだが声が出ていない

「貴様!! 三月になにを!!」

「だーかーらー、話せなくようにしただけ。今の流れからきて分かるでしょ？ 空気読めよな。キミらが答えてくれれば解いてあげるし、質問にも答えてやるからさ」

こんな人質とるつもりなかったのに、
と呟きながら、背も垂れにドスツとよっかかる

「で？話すの話さないの？」

「…別に隠す事でもないんだし話したら？」

今にも飛び掛かりそうな帽子屋に向かってチェシャ猫が促す

「……今の向こうの状況だったな…」

「ああ。やっと話が進みそうだな」

話し始めた帽子屋を緑は笑顔で見る

「この私分かりやすくシンプルにまとめてやろうではないか」

ふんつとイヤミったらしく言い放つ

「城にいた女王と芋虫、公爵、そして赤薔薇と白薔薇が消息不明だ」

「…そんなことはどうでもいいから、状況だよ内部事情！！国全体はどうなってるか聞きたいのー」

言葉足りなかったねー悪い悪いと軽く言う

「そんなもの、白ウサギが管理してなんとかなってはいたが…今は知る術もないな」

「ふむ…」

…ということは、いるもんいなくて混乱状態の可能性が高いわけだ

それを聞いた緑は少し考えた風になる

それを遮り帽子屋が話す

「それよりも、質問に答えてもらおうか？」

「ん？ああ、いいよ。ふたつね」

それに対し素っ気なく答えた

「貴様は何者だ？」

「俺？俺はアリスの兄貴の友達だよ」

「嘘をつくでないよ。こっちの事情を知ってるという事は、少なくともこちらに関係があるはずだ。それを答えたまえ」

「やだなあゝ冗談通じない人は」

笑いながらパチンと指を鳴らす

「今度はなにを…っ」

「やだなあゝ。三月の声を戻してあげたんじゃないか」

「む？」と、三月が声を出す

帽子屋がほっとした顔をしたが、すぐにまた敵を見るような顔になる

「それよりも貴様質問に…！！」
「はいっ麦茶っ」

話を戻そうとした帽子屋の前にドンツと麦茶のボトルが置かれた
見上げるとアリスが戻ってきている

「おっ！！サンキューアリス」

緑もいつの間にか前の格好に戻っていた

と、緑の視線がアリスの横に移る

そこには白ウサギがニコツと微笑んでたたずんでいた

「……！！」

「おや？白ウサギじゃないか」

「あれ？ずっといた気がしてたけど……」

「……いなかったのか……？」

三人がそれぞれ口を開き、はっ！！と、一斉に緑を見る

「やってくれましたね芋虫さん……」

ニコニコした笑顔を崩さず白ウサギくんがいつもよりトーンの低めの声で喋る

「……アリス…どこで白ウサギを…？」

引きつった笑いを見せる芋虫

「え、なんか外から音がしたから窓開けたらいたみたいな…」

「ふむ、じゃあ今度からはもっと別の場所にしよう…じゃあねアリス」

今まで座っていたはずなのにいつの間にか芋虫は庭へと続く窓を開けて立っていた

状況を飲み込めていないのはアリスだけだ

「こらっ！！待ちなさい芋虫！！」

白ウサギくんが走り出したが、ドテンっと、なにもないところで転んでしまった

「「白ウサギ（くん）?!」「」

帽子屋と三月とアリスが叫びアリスが駆け寄って大丈夫?と立たせる

それを見て芋虫がクスツと笑う

「白ウサギのそうゆうところ…嫌いじゃないよ」

そう言い、芋虫はパチンと指を鳴らした

ヤバい！！と思った時には既に遅く

意識が朦朧とし始め、最後に見たのは、芋虫が「じゃあ、またね」
と残して消えていくところだった

21日目 芋虫（後書き）

芋虫

身長：170cm

体重：57kg

目：エメラルドグリーン

髪：淡いような深いような緑

性格：おちゃらけ。命が関わるとちゃんとやる（女王の側近。

白ウサギとは仲がいいような悪いような…

城以外の人にはあまり知られてない

アリスの家にはよく出没してた（る？）

22日目 事後

「ふふ…ヤバイヤバイ」

芋虫はアリス邸の門の前を街に向かって下っているところだ

今みんな寝てるところかな　　とクスクス笑いながら

「それにしても…」

これをあの人達に教えたほうがいいのか悩みどころだな…

女王の側近といえど、何から何まで伝えるわけではない

伝えなければならぬ事を伝え、その他、スケジュール管理、着替
や食事の用意をするくらいなものだ

それに、今、女王は恋人と一緒にいるからやる事など無いに等しい

アリスも手伝いが必要な歳でもないしなあ…

もう16年か…

確か1年で1週間だから、あつちではたかが4カ月程度だろうけど…

そろそろ国が恋しくなってきたな…

芋虫は歩きながらふと、星空を見上げた。

+

目が覚めるとガッツリカレーの匂いが漂ってきた

「ん…？」

カレー臭…

一番に目が覚めたのはアリスだ

そして、続々と目が覚める全員第一声は「「カレー臭い…」」

あたし、なんでこんなところで寝てるんだろ…

………思いだせない…

「むう…」

寝起きの頭じゃなに考えたって無駄だなと思い、テーブルの上に乗っているカレーの皿もろもろを片付けようとする

「つか、なんでカレーが…？」

「手伝うよ」

上から声がしたと思ったら重ねて持っていた皿をヒョイツと奪われたところだった

「あ、ありがとチエシャ猫」

そのチエシャ猫は「いゝえゝ」と言いながらキッチンに消えていった

十

「むゝ…」

アリスは机に向かい、夏休みの宿題をやっている。が、飽きたのか暑さでダルいのかぐだーっとダレている

チエシャ猫と洗い物をした後、アリスは全員に話を聞いてまわっていた…が、諦めた

昨日なにがあったか覚えてる人がいないなんて…

「謎だ…」

独り言を呟くと部屋をノックする音が聞こえた

「はい？」

「アリス、息抜きにお茶しよう」

返事をすると思こえたのはチェシャ猫の声

「うん!!」

私は遊んでいたペンを置いて駆け出し勢いよくドアを開けた

バアンッ

ん？なんか当たった感触が…

「ち…チェシャ猫…？」

「…ハアイ？」

恐る恐るドアを引いてみるとそこには鼻を赤くしたチェシャ猫がいた
当然私の顔は真っ青。

「うっ…うめんなさいうめんなさいうめんなさいうめんなさい…」

「いや、大丈夫だから」

鼻を擦りながら私のごめんなさい攻撃を遮った

「それより、行こうか」

スツと腕を差し出すチエシヤ猫

しっ…紳士だ!!

私はすかさず差し出された腕を掴んだ

なんか反射的に

いつも帽子屋みたいなエセ紳士を見ているせいか素晴らしくかつこよく見える

奴なら絶対「なにをする!!私の美しい顔が台無しではないか!!」とか文句言っくに違いないのに…

まあ、実際綺麗なんだけども…

「ぶっ」

そんなことを考えているとチエシヤ猫に笑われた

…あ、そういえば丸聞こえなんだった…

思い出した途端恥ずかしくなったのか顔を赤らめる

「そんな恥ずかしがっちゃって」

「…だつて!!」

「今更じゃない?」

「うぐっ」

からかうようにチエシャ猫が話す

むう…からかつてる?この人(?)からかつてる!?

「アリスって面白いよね」

「なにがよっ」

「思ってることがまんま顔に出てるんだもん」

ほらまた〜と言って空いている方の手でホッペをつつく

嫌なら腕を放せばいいのだが、一度掴んでしまった手前放すのもなんか惜しい…

と、またチエシャ猫に笑われる…

そんなことをくり返しながらふたりは中庭に向かうのでした

23日目 チェシャ猫とアリス

「あれ？他のみんなは？」

着くと丸テーブルの机には四つのイスが置いてあるが二人分のセツトしか用意されていない

「ああ、あの三人（二人＋一匹）は図書館行ったよ」

イスを引いて座るよう促されるとアリスは座ってチェシャ猫を見上げる

「そうなの？」

「うん。アリス勉強してて邪魔しちゃう悪いからって言伝頼まれまして」

チェシャ猫がカップに紅茶を注ぐ

「気にしないでいいのに…」

「みんな気を使ってくれたんだからそんなこと言わないの」

帽子屋は気なんて使ってなかったけど…

「けど行きたかったなあ…」

やっぱりしよげるアリス

「俺と二人じゃ不満？」

自分の分も注ぎ終えたチエシヤ猫はアリスの横のイスに座りくつろいでいる

「そんなことないけど…やっぱりみんなでワイワイやりたいかなあつて…」

「俺はこんな風に二人でまったりしててもいいと思うけどねえ」

それに…とチエシヤ猫が続ける

「ほとんど毎日…と夜は必ずワイワイやるんだから…特に帽子屋の相手なんてさ」

疲れるだけじゃん？と話すチエシヤ猫

確かに…と思いアリスが「ぷっ」と吹き出せば「でしょ？」とチエシヤ猫もケラケラ笑いだした

十

あー…腹筋痛い

これもチエシヤ猫がおもしろおかしく三人の話するからだよ…

そのチエシヤ猫はというと冷やして置いたとゆうデザートを取りに行っている

帽子屋が実はリアリストだとか…

三月ちゃんが怪力だとか…

今も思い出すと……ぷっ

中でも一番面白かったのは白ウサギくんの実は大人なんです疑惑かなあ……だってあのドジでまぬけな可愛い白ウサギくんがだよ？！

思わずありえないって爆笑しちゃったもん

「……まだ笑ってんの？」

「ぎゃあー!!」

……ガターン!!!!!!!!

クスクス笑っていると声をかけられ、アリスはビックリしてイスごと倒れた

「いいいいいい戻って来たの?!」

「たった今だよ」

丁度いいやとゆう感じでアリスには見向きもせず鼻歌を歌いながら
チエシャ猫は持ってきたデザートを置く

…せめて心配くらいしてよね…

「ん？心配して欲しかったの？」

……む…

そつえば心の中読めるんでしたね

白々しくチエシャ猫が言う

「わかってるくせに…」

ぷくつとアリスが頬を膨らますと
チエシャ猫がニツコリ笑って

「デザート温くなっちゃうから早く食べよう？」

暗に、そんなのどうでもいいからと聞こえてきそうだ

「うん…」

確かに美味しそうなゼリー…

手が差し伸ばされないのはわかっているので、自分で立ち上がりイ
スを直す。そしてアリスが座ろうとすると

「ちょっと待って」

え？

「せめて汚れは払ってよね」

手で軽くパンパンとスカートについた汚れを払うチエシャ猫

「あ…ありがとう…」

「いーえ。」

終わったのかチエシャ猫はイスを引いてどうぞ？とアリスを待っている

むー…、こうしてるとちゃんと執事っぽいんだけどなあ…

まじまじとチエシャ猫を見る

「………そんなに見ないでよ。ほら、早く座ないと食べちゃうよ？」

…え？ゼリーを？

そこで少し考えた私の頬にチエシャ猫の手が触れた

………ん？食べるって…わた…

「んなわけないでしょ」

最後までいくまえにチエシャ猫が不快と顔に貼り付けてむぎゅっと思いつきりつねった

「痛い！いたつイタタタタタア！！」

「おつ柔らかいねえ」

痛いという叫びが耳に届いていないのか私をスルーし奴は感動したようにほっぺを伸ばす

「にゃっにゃにしゅんによお?! (なっなにすんのよお?!)」

涙を浮かべながら抗議すると、「つねってんの。見て分らない?」と返された。

見なくてもやられてんだからわかるっの!!

「座っておやつ食べる?」

「はへるはよ!! (食べるわよ!!)」

なによっ私がまだおやつにありつけてないのはチエシャ猫のせいじゃない!!

ピクツとチエシャ猫の耳が動いた

「...ごめん。何言ってるのかわかんないや」

そんなはずない!!

むうっとチエシャ猫を涙ぐんだまま睨むと

ムツツギユーーッ

「〃〃〃 % & 〒

十丄

十十

!!!!

!!!!!!!!!!!!!!」

両方のほっぺを引つ張られた。力一杯。

「俺ねえ、俺のせいじゃないのに俺のせいにされるの大っ嫌いなのに」

ニコニコ笑いながらほっぺをまわしたり、たてよこにしたり遊んでいる

アリスはもうやられたくはないので瞳に涙を浮かべ、ヒリヒリするほっぺを我慢しながら大人しく聞いている

「それにさ、アリスがおやつにありつけないのもさっさと座らなかつたアリスのせいなんだよ?」

なるほど、チエシヤ猫的、原因が私なのにチエシヤ猫のせいと言ったのが悪かつたのか…

……だとしても待たせたのはほんのちよつとじゃない…

「ん?なんか言つた?」

チエシヤ猫の指先に力が入る

「いいいいえ!! ひよんでもごじやいません!! (とんでもごじや

「いません!!」

「ふむ、謝罪に免じて今のは聞き逃してあげるよ」

とりあえず、とチェシャ猫が続ける

「まあ、身を犠牲にして学んだらうから…次からは気をつけてね？」

コクリとアリスが頷く

「……返事は？」

「…はいっ」

無言の頷きはダメですか…

やっとありつけたゼリーは温くなってはいたがとても美味しかった

「マンゴー味のゼリーにマンゴーソース　上に乗った生クリームとマンゴーの果実がまた…」

ようはマンゴーゼリーだったわけで

「そんなに美味しい？」

私が味わって食べている間にチェシャ猫は食べ終わったのだからテーブルに肘をつき、頭を支えた状態でこっちを見ている

「うん!!めっちゃ美味しい!!幸せ」

「そう?よかった」

さっきの機嫌とは打って変わってニコニコと上機嫌っぽい

アリスも痛みなど忘れたかのようにルンルンしている

…それから少し経って私が名残惜しそうに最後の一口を食べ終えた

……食べ終わってしまった…

「じゃあ行こうか」

チエシヤ猫が立ち上がる

気付くと涼しい風が吹いている

まだ明るいが時間的には夕方の4時くらいだろう

「もうこんな時間なの?」

「うん。すごい味わって食べてたね」

うっ…

「だって美味しかったんだもん…」

「さっきも聞いた」

スツと手がのびてくる

…!! つねられる!!

え? なに? 時間かけて食べたのが悪かったのかな?!

身構えたアリスだが一向に痛みは感じない

感じたのは頭を撫でられる感触だった

ん?

キョトンとした顔で見ていると

「…つねられたいの? もしかしてアリスってM?」

ブンブンと横に顔を振る

「答えになってない気がするけど…まあいつか」

チエシャ猫が頭に乗せていた手をはなす

「俺、片付けてくるけど、どうする?」

「ん…もうちょっといる」

「そう?じゃあまた後でね」

去って行くチエシャ猫を見送ったアリスは木の下の木陰に移動する

ちよつと暑いけど…お昼ほどじゃないし…

風も涼しいし気持ちいな

「…ふわわあ」

…眠くなってきたなあ

ちよつとだけ…

欠伸をした後、木に寄り掛かって目を閉じた

チエシヤ猫 side

夕飯を作り終えた

時間は6時くらい。あれから2時間は経っていて外も夕闇が濃くなってきた

そつえば静かだな…

ああ、アリスが戻って来てないのか

仕方ない…と外へと向かった

庭へに着き辺りを見渡すと、木の下で寝ているアリスを見つけた

近付くとアリスは…

「寝てるし…」

春でもないし暑いから寝にくいだろっに…

「アリスー」

声をかけてみるが熟睡しているらしく起きない

ふう…

なんか俺も眠くなってきたな…

ストーンとアリスの横に腰掛ける

その時フツと視界に二本の薔薇が目に入った

… 赤薔薇と白薔薇

まるでこちらを覗き込むかのように

「…不快だな」

……グシャッ…

二色の花びらがチェシャ猫の手のひらからハラッと散っていった

+

「ん…」

「あ、起きましたか？」

目を開けるとそこには白ウサギくんの顔があつた

え？白ウサギくん？

っーか真っ暗…

「やっと起きたの？」

横を見るとチェシャ猫が座っている

やっと解放された」

とばかりに伸びをしてスタスタと歩いて行ってしまう

どうやら彼に寄っかかっていたらしい

「やっと起きたのかい?! さっさと起こしてしまえばいいものを!
! おかげで腹ぺこじゃないか!」

イスに座って紅茶を飲んでいる帽子屋
足を組んでいるのは言うまでもない

寝起きに帽子屋はうざいな…

「帰ってきたらふたりして寝ているから驚いたぞ。」

しかし、夕飯は作ってあったから問題はなかったがな

と三月ちゃん

「起きるの待っていたんですよ」だからみんなお腹ぺこぺこなんです!」

白ウサギくんが手を引く張る

「先に食べててくれても良かったのに…」

てゆーか、それが普通だと思ってたし…

そう言つと白ウサギくんがキョトンとした

「なにを言つんだい!!」

返事をしたのは帽子屋だ

「独りで食べる食事ほど不味いものはないね!!」

「ですよ」

「ああ」

「…たまにはいいこと言つじゃん」

三人が同時に頷く

帽子屋のことだ、自分が楽しければいいとかいいそうだもんな…

さあ!!ご飯にしましょう!!

と今度こそ席に連れて行かれ座らされる

「たまには外での夕飯もいいね」

「だろう!!それに気付けたんだ!僕に感謝したまえ!!」

「いいから落ち着いて食べんか」

三人のやりとりを見て白ウサギくと私は一緒に笑う

ヤマネくんはテーブルの上で寝そつになりながらもモグモグしている
彼らが来てからの日常…

ポタッ

「…アリ…ス？」

「…お姉さん？」

「なにを泣いているんだ？」

「…え？」

ポロツと温かいものが頬を伝っていくのに気付いた

「あれ？」

なんで涙なんか…

「や…やだなあ…楽しいのに…なんで…っ」

「…ん」とチエシャ猫にタオルを渡される

「……今までこんな楽しいのなかったから……」

渡されたタオルで涙を拭う

「ふむ、ディナーの楽しさを知らなかったのかい？ならば涙の理由も領けるね！これからそんな愚かな（バカな）人達の事は放っておいてパーッといいこうではないか……！」

「……そういえば花火とゆうのがあったので買ってきたんですよ……」
気晴らしにどうでしょうか？

白ウサギくんがビニールを持ち上げる

「……うん！やろう……！」

アリスに笑顔が戻る

もう涙は浮かべていない

そんな楽しい一夜

この時間がずっと続けばいいのに……と

誰かが呟いた

23日目 チェシャ猫とアリス（後書き）

ラブ×2が書けませんorz

期待していたかたごめんなさいm(┐┌;)m

きつといつの日か(┐┐;) (

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4144d/>

お家の国のアリス

2010年10月15日10時03分発行